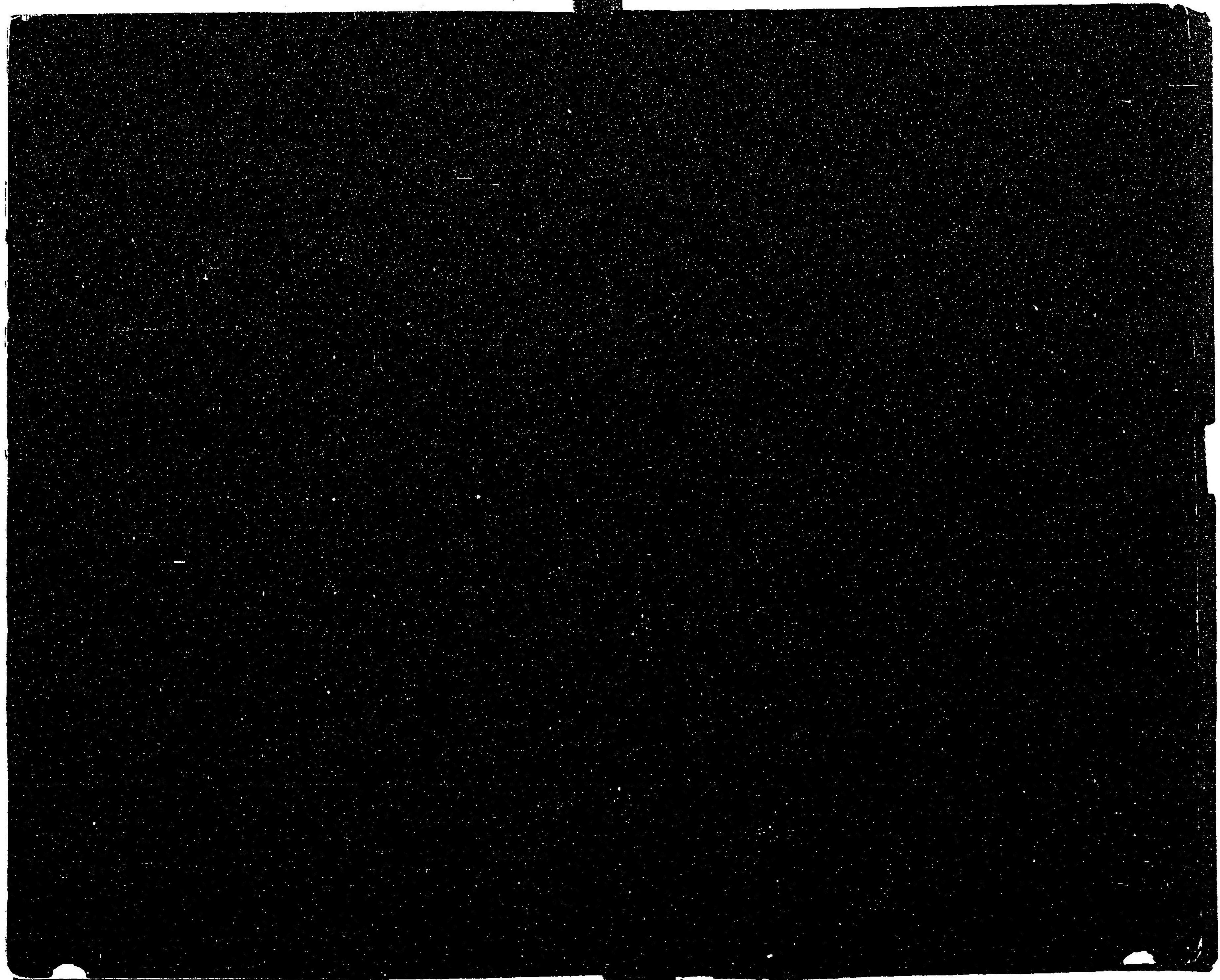


32
167

坐禪和讚講話



釋 宗 演 著

坐 禪 和 讚 講 話

東 京 光 融 館 藏 版

1 8 2
內 交

坐禪和讚

正宗國師白隱和尚作

衆生しゆじやう本來ほんらい佛ほとけなり
水みづを離はなれて氷こほりなく
衆生しゆじやう近ちかきを知しらずして
譬たとへば水みづの中なかに居ゐて
長者ちやうじやの家いへの子ことなりて
惡趣あくしゆ輪廻りんねの因緣いんねんは

水みづと氷こほりの如ごとくにて
衆生しゆじやうの外ほかに佛ほとけなし
遠とほく求もとむるはかなさよ
渴かつを叫こゑぶか如ごとくなり
貧里ひんりに迷まよふに異ことならず
己おのれが愚痴ぐちの闇路やみぢなり

闇路に闇路を踏そへて
夫れ摩訶衍の禪定は
布施や持戒の諸波羅蜜
其の品多き諸善行
一座の功をなす人も
惡趣何處にありぬべき
辱くも此の法を
讚歎隨喜する人は
況や自ら回向して

いつか生死を離るべき
稱歎するに餘あり
念佛懺悔修行等
皆この中に歸するなり
積し無量の罪ほろぶ
淨土即ち遠からず
一たび耳にふるゝ時
福を得ること限なし
直に自性を證すれば

自性即ち無性にて
因果一如の門ひらけ
無相の相を相として
無念の念を念として
三昧無碍の空ひろく
此の時何をか求むべき
當所即ち蓮華國

既に戲論を離れなり
無二無三の道直し
行も歸るも餘所ならず
謠ふも舞ふも法の聲
四智圓明の月さえん
寂滅現前するゆゑに
此の身即ち佛なり

坐禪の功能

坐禪工夫の法によりて、下腹に力を入れ、肺臓及び心臓の活動を充分ならしむるときは、臆病のものは大膽となり、急性なるものは寛大となり、一時の欲に驅られて前後を知らぬものは、よく冷然として群慾を退くるを得、つまりぬことを氣にかけ、常に尊々として樂しまざる厭世家は、よく膽を放ちて、快濶なる人となるを得べし、これは古へより坐禪に身を委ねたる人の親しく證明する所にして毫厘も疑を容るゝの餘地なし。

(洪嶽老師著『靜坐のすゝめ』)

正宗國師白隱和尚坐禪和讃講話

釋 宗・演 述

第一序 辯

正宗國師白隱和尚の『坐禪和讃』に就いて、其の大意を講話するは方り、本文に入るに先だちて、少しく坐禪のことを話して置かねばならぬ。

古來禪に就いては、種々の名稱があつて、或は外道禪であるとか、凡夫禪であるとか、或は聲聞禪とか、菩薩禪とか、其の

他諸佛頂上禪とか、如來禪とか、やれ祖師禪の達磨禪の、扱ては石塊禪の頓智禪のと、數限りもなく申し立てるけれど、畢竟するに、之れは皆人と云ふ器に移して後に、互に比較した上でのことで、禪にさる種類や差別の有り得る道理はない。禪其の者に就いては大小長短、廣狹淺深と云ふやうな沙汰は無い筈のものである。故に臨濟禪師も心法は形なくして十方に通貫す」と申された。心法は無形的のものであつて、十方世界に通貫遍在すること、法身佛の三世十方に通貫遍在するが如きものである。さうすると禪と云ふ法門は遠方の者で、之れを遠きに求めねば得られぬものであらうと思ふ人もあらうが、處として無い處はないから、極めて近きに在るのである。故に又臨濟禪師は、「即

今孤明歷々、說法聽法底是れなりとも、手近に之れを示して居られる。即今聽法底の其處に在ると指示されては、又近すぎて見えぬであらう。是に於てか禪の實際的修行を要するのである。禪の實際的修行と云つて、外に修行の方法があるのでない。即ち坐禪が禪に於ける實際的の修行である。坐禪と云ふことはたゞ黙つて目を冥つて坐つて居るのでない。然うかと云つて、一休和尚や何かの眞似をして、頓智を以つて公案を言ひ當てやうとしたり、果ては一喝を吐いたり、棒を振り廻したりして、之れで禪であるのと言ふやうに誤解してはならぬ。かう云ふ誤解をするから、石塊禪だとか、頓智禪だとか、色々に言はれるのである。今曹溪六祖大師の説に隨つて、坐禪の定義を下せば、

左の如くである。

外に向つては、一切善惡の境界に於て、心念起らざるやうになつた所を坐と云ひ、内に向つては、自性を見て、動ぜざるやうになつた所を禪となすのである。

此の定義に依つて見れば、坐禪の極意は、敢て坐つて居るには及ばぬ。四角四面に坐つて居らねばならぬと、局られたものではない。實際然うである。坐禪するため、山に入つたり、禪堂に入つたりばかりするのが能てない。今日激甚なる東京日本橋の真中で、此の坐禪の修行が出来るのである。彼の大燈國師は、京都四條橋下に乞食を接化し、坐禪せば四條五條の橋の上、往き來の人を深山木に見てと詠つて居られるではないか。坐禪

の實際的修行とは此處を云ふので、所謂行亦禪、坐亦禪となつた所で、初めて坐禪の眞面目が顯れるのである。然しながら、之れは久參の上士に就いて言ふので、初心の者には出來ぬことである。乃て初心の者は、是非とも、彼の『坐禪儀』に説いてある作法に従つて、綿密なる修行を重ねなくてはならぬ。故に眞實の禪定に入る順序としては、坐るのが、又實際的修行になるのである。

抑も坐禪は大解脱の法門と云つて、一切あらゆる善根功德も、智慧神通も、皆此の法門から湧き出づるのである。古徳も禪は佛心なり、律は佛形なり、教は佛言なりと云はれた。即ち之れを身口意の三業に配すれば、佛言は口業で、佛形は身業で、佛

心は意業に當る。三業離るべからざる關係を有するけれど、其の本末を論ずれば、意業は根本で、身口二業は枝末である。故に其の枝末たる律や教家の上に、如何に善根功德があればとて其の根本に歸して觀れば、禪の佛心の善根功德に外ならぬ。況んや禪其の者に、既に善根功德や、智慧神通を有して居るから、争はれぬ事實である。然るに或る者は之を疑ひ、禪は諸教の根本であると云ふけれど、禪定は畢竟無念無相で、悟を開いたと云つても、一向其の靈徳が外面に表れぬ。いくら悟つたと稱へても、相變らず眼横鼻直の人間である。智慧神通を生ずるなど云うても、水を汲み柴を搬ぶとか、是を是とし、非を非とする位で、更に深智ありとも見えねば、神通不思議の功能も現

れない。然るに却つて技末の教と云はるゝ宗旨や、他の宗教になると、御祈禱に依つて息災になるとか、延命の益を蒙るとか、七難即滅して、七福即生るとか、或は又御神水を服すれば、病氣も平癒するとか、安産するとか、或は死後復活して天國に上生するとか、種々なる靈驗があるにも拘らず、却つて其の根本たる禪に此れ等の福德利益はないのである。見性成佛など云つても、何等の證據なきのみか、其の日暮は未開迷惑の人と殆んど選ぶ所がないのである。斯かる見解に在る人は、所謂智慮淺き者で、此の如き淺智の人に對して、説明するのも恐の至りであるし、又説諭するのも困難であるが、説かねば、反つて大道に對して不親切の謗を免れぬゆゑ、聊か老婆心を披瀝して置

かうと思ふ。

前に云ふ如く、禪は大解脱の法門であつて、善根功德も智慧神通も、全くこの禪より生ずるのである。大解脱とは、換言すれば轉迷開悟の教である。轉迷開悟は文字の如く、迷を轉じて悟を開くのである。迷とは所謂衆生顛倒して、己に迷うて物を逐ふと云ふ如く、自己本來無上の寶を持つて居ながら、其れを知らずして、却つて他家の金銀財寶を望むやうなものである。之れを和讃の本文では、「譬へば水の中にあつて、渴を叫ぶが如くなり」と示し、或は『法華經』の譬喩たる長者窮子をもて、「長者の家の子となりて、貧里に迷ふに異ならずと諭されたのである。幾ら數へたからと云つて、他人のものなら、不義を働いても自

己の者にはならぬ。此の如き見易き道理が解かれば、先づ禪宗に這入り得る根機ぢや。他宗他教の如く、御祈禱だとか、御神水だとか、或は復活だとか云ふ如きは、一種の神秘的道理があるにもせよ。悟の開けぬ分齊に在つては、皆な迷信と云ふものである。論より證據で、幾ら家内安全、息災延命の祈禱をして居るからと云つて、父は父ならず、子は子ならず、夫は夫ならず、婦は婦ならずでは、遂に一家が治まる時が来るものでない。藥をいくら飲んで、醫者の注意をも守らず、不養生のみして居て、病氣の癒つた例の無いのと同一般である。故に先づ、此の迷を轉じて悟を開くの法門に依るを以つて肝要とするのである。

又禪宗て謂ふ所の、智慧神通と云ふことは、有の儘の者を、有の儘に、而も凝滞なく、自由自在に使ひ廻すことである。瓢箪から駒が飛び出したり、吐月峰から蛇が跳ね出たり、或は七日目に世界が出来るの、脇下から兒が生れたりするやうなことは、一寸神通妙用の如く見えるけれど、かゝる事をもて、直に神通妙用と認めたら、夫れこそ大なる誤謬である。吾が禪宗の神通妙用は、朝起きるより、夜寐るまで、洒掃應對、進退坐臥の上、さては折旋俯仰の間、機に應じ縁に随つて、活潑々地の働をなし、些とも蹉過することなく、鏡の像に對するが如く明て、玉の盤を走るが如く滑かて、更に凝滞する所ない作用を云ふのである。而も其の作用活動は、一々理に契うて、誤るこ

となく、如何なる事に逢着するも、痛快なる解決を加へて、快刀斷麻の如くである。夫れ一凡夫の身を以つて、禪定を修し、其の心を實究するに随ひ、實相の觀法明けく、斯くの如き智慧神通を生じて迷ふことなく、惑ふことなき境界に至ることを得るのである。之れ既に神通不可思議のことではないか。

扱て此の大解脱の法門に入らうと樂ふ者は、先づ端坐して實相を觀ずるのが肝要である。端坐とは如來の結跏趺坐で、其の法式は『坐禪儀』に出て居る通りである。今其の大要を述べれば、先づ右の足を以つて、左の脛の上に安んじ、左の足を以つて、右の脛の上に安んずるのである。而して右の手を以つて、左の足の上に安んじ、左の手を以つて、右の掌の上に置き、兩手の

拇指の面を以つて相ひ挂へ、徐々として身を擧げ、前後左右
反覆搖振して、乃ち身を正しうして、端坐するのである。是の
如く端坐して後は、左右に傾くことも不可ぬ、前に俯したり、
後に仰いだりすることも不可ぬ。腰脊頭頂を挂へて、正しくし、
耳と肩とは相ひ對し、鼻と臍と相ひ對し、舌は舌上の腭を挂へ
唇齒相着け、眼に須く半開にして鼻端を守るべきである。若し
眼を開いて遠く見る時は、外界紛飛の境に侵されて、心が散亂
するの恐れがある。又全く目を塞ぐ時は、内界昏沈の境に落ち
て、心中明かならぬのである。此の兩端を超えて、念想勿々な
らず、身心一如になるのが、結跏半目の當體である。かく結跏
趺坐の法式に依つて、實相を觀ずるのであるが、實相は有りの

儘の相狀を云ふので、觀ずるとは、觀察思惟することである。
この觀察思惟と云つても、決して今の學説で云ふ通りに、腦髓
で考へるのではない、腹の中で考へるのである。下腹部に十分
力を入れて、思惟觀察するのである。若しこの結跏趺坐の法式
に依つて、實相を觀じ、悟門未だ開けざるも、一座の坐禪は一
座の佛で、一日の坐禪は一日の佛で、一生の坐禪は一生の佛で
あるから、一座は一座と功を積んで行くが宜しい。
因に坐禪の功力に就いて、歴史上の實例を擧示して置く。昔
の正應年問の事であると云ふが、龜山天皇が龍山の離宮に御座
の時、毎夜々々妖怪變化が靈はれて、宮中の妃嬪方を魅惑し、
誠に御困り遊ばされたことがあつた。乃て群臣の奏聞に因つて、

當時の各宗より、高僧碩徳方を宮中に請し、加持や祈禱と、あらゆる法を修せしめ、この妖怪變化を退治せよと勅命を蒙つて、法力の限りを盡したけれども、更に妖怪退治の靈験が見えぬ。是に於て、最後に、無關國師を宮中に召し出だされ、良くも、妖怪變化の退治に就いて、勅問を蒙つたのである。此の時無關國師は「妖は徳に勝たすと世書に尙ほこれあり、况んや佛法をや、釋子此に居らば、何の怪物か之れあらんと奏した。是に於て師は命を受けて、宮中に安居して居られたけれど、別に何の修法もなく、毎日衆僧と粥飯を喫し、坐禪を打するばかりで、あつたにも拘はらず、宮中内の妖怪變化もいつの間にか退治されて、宮中は永く平安であつたと傳記に載せてある。之れ等は其の實

相を觀するより生じた所の功德と見てよいが、坐禪の功德は實際に於ては、かゝるものでない、故に本文にも、「一座の功をなす人も、積みし無量の罪ほろぶとある。實に其の功德の廣大なること、言語に絶して居るではないか。尙ほ之れ等の功德に就いては、本文に入つて後、詳に申し述べようと思ふ。

序辯も段々長くなつて來ましたが、本文に入る前に、この『坐禪和證』の作者たる、白隱禪師の略歴を、話して置くのが、順序であるから、其の大略を話して、置くことにする。白隱禪師、諱は慧鶴、皓林と號し、駿河國駿東郡原驛に生る。天資英邁、夙に出家の志あつて、年甫めて十五、單嶺傳和尙に就いて得度し、沼津の大聖寺息道和尙に侍して居つた。後美濃に遊び、瑞

雲寺の馬翁に參じ、日々修養して居つたけれど、心未だ明てなかつた。乃て冥目して大藏經中より一卷を探るに、『禪關策進』と云ふ、禪定を進むる書物を探り得たのである。師之れを得て大に感ずる所あり、同書を坐右より離さず、之れを愛讀し、坐禪の修行も堅固であつたと云ふ。之れより京都、備後の福山、備前の岡山、等名師の門を敲いて歴參し、北國を巡りて越後高田に到り英巖寺の性徹に參じ『人天眼目』を聴く。師一日所解を師匠に呈するに許されなかつた。是に同學の友、宗格と云ふ者があつた。之れは信州飯山の正受庵老人、即ち慧端禪師の門人であつた。宗格乃ち師を誘ひ、飯山に還りて、師を正受老人に介した。師は正受老人の許に留つて眞參實究、遂に臨濟の正宗

を得たのである。固より師の今日大悟あるは、從來の修行其の因を成しては居るが、正受老人の接化また與つて、力ありと云ふべしである。後老人の門を辭し關山下の法燈を嗣ぎ、東西に雲遊して居られたが、享保元年松蔭寺に住し熾に宗風を擧揚されたのである。翌年に至りて京都に入り妙心寺の第一座に轉じ、又龍澤寺の開山第一祖となられた。師何れに在るも、四來の學徒謂集し、其の門庭の盛なること、實に古來多く聞かざる所であつたと云ふ。其の多き時は、七百餘名の雲水集り來つたと云ふから、其の道聲の高かつたことも、推知するに難くないのである。明和五年十二月病を以つて松蔭寺に寂す。年八十四。翌年後櫻町天皇特に諡して神機獨妙禪師と云ひ、今上天皇更に勅

して正宗國師と諡された。其の著書も仲々多いことである。今此の『坐禪和證』を看ても分ることであるが、其の著書概ね平易簡明を旨として居られた。尤も白隠禪師の家風なるものが、實にこの平易簡明、眼に一丁字なき野翁婆子を化すると云ふにあるのであつた。今日の語を以てすれば、師が接化の方針は、實に平民的布教であつたのであつた。先づ序辯は此の位にして置いて、本文に入つて、篤と辯ずることに致さう。

第二 本文講話

衆生本來佛なり

水を離れて氷なく

水と氷の如くにて

衆生の外に佛なし

此の四句は一連にして見なければ、法味を味ひ難い。衆生は凡そ生きとし生ける者を指すけれど、主としては吾々人類を意味する。即ち迷界に在る者の代表者として衆生を示し、悟界に於ける極所を出して佛と云つた。佛は具には佛陀と云つて、覺者と譯する。迷悟相對したので、煩惱即ち菩提と云ふも、生死即ち涅槃なりといふも同じ意味である。迷界に在るを衆生と云ひ、悟界に在るを佛陀と云ふ。迷へば衆生、悟れば佛陀であるが、

今はソナ野呂間な言ひ方ではない。衆生其のまゝ、佛陀、佛陀其の儘衆生ぢやといふので、迷即悟、悟即迷といふので、生死即涅槃、涅槃即生死といふ味である。「般若心經」の色即是空、空即是色と全く同じぢや。色法の當體其の儘空となり、真空其の儘山川國土の色相を現ずるといふ所に住すれば、可愛憎いの隔が無くなる、隔の無い其の中にも、妻子は可愛い、慾深婆様は憎らしいの差別がある。差別即平等、平等即差別、何れから行くも同じ道、分け登るふもとの道は異なれど、同じ高嶺の月をながむる。天台の教理から言ふならば、一念三千、十界互具互融ぢや。十界互具互融といふから、佛即ち餓鬼、餓鬼即ち佛、畜生即ち佛、佛即ち畜生、衆生即ち佛、佛即ち衆生である。衆

生本來佛なり、此の最初の第一句さへ會得出來て、而も我が肉となり血となれば、此の『坐禪和讃』の講話も、茲で止めて仕舞つて宜い。處が此の一句が分らぬから、白隱禪師は二十二行四十四句に説き述べられた。白隱禪師ばかりか、釋迦如來は五千餘卷の教を遺し、高僧大徳總がかりて垂教されて居る。不肖ながら拙稿迄でも此の法席に臨んだ譯である。「圓覺經」には、「善男子一切衆生は圓覺を證る。善智識に逢ひ、彼の所作因地の法行に依つて、爾の時に修習するのに、頓悟する者もある。漸悟する者もある。若し如來無上善提、正修行の路に遇へば、衆生の機根に大小の差別なく、同時に皆な悉く佛果を成ずると説いてある。或は又同經に始知衆生本來成佛、生死涅槃猶如昨夢とも

ある。今和讃の第一句は此の文の意を述べたもので、衆生本來佛である。固より衆生と佛、迷と悟とは、さうかけ隔てたのではない。其の迷即悟の關係を示すのが、次の氷と水の如くにて、水を離れて氷なくの二句である。これは譬喩を以つて佛凡一體の旨を示すのである。氷は本來水である、水を離れて氷なく、氷の當體其の儘水で、水の當體其の儘氷である、凝結すれば氷となり、解くれば本の水となる。雨あられ、雪や氷と隔つれど、解れば同じ谷川の水。凡夫だ佛だと言つて居る間は、迷見を以つて隔歴して居るが、若し其の隔歴の差別見を離るれば、衆生の外に佛なして、此の身其の儘佛であつたのである。たゞく佛を遠方に求めようとして居つたのに氣付くのである。白隠禪

師は人々の隔歴差別見あつて、衆生本來佛なることを知らざるを歎き、次下四十句を讃出されたのである。

衆生近きを知らずして

遠く求むるはかなさよ

最初の一句に、「衆生本來佛なり」と示されたのを、折り返して述べられたのが、此の二句である。衆生本來佛と云へば、之れほど近いものはない。然るにこの佛を遠くに求めようとするのは、衆生の迷ひが覺めぬからである。孔子聖人も「道は近きあり、却つて之れを遠きに求む」と教へて居られた。儒教に謂ふ所の道と佛教に謂ふ所の道とは、其の内容は違うて居るけれど、其の教へ方は今と同じである。先づ極樂往生を願ふ者にしても、極樂は西方十萬億土を過ぎて向に在るとばかり思つて居る者は、

仲々往生が出来ぬ。念佛宗で用ふる『觀無量壽經』には極樂を指して、「此を去ること遠からず」とある。それでも凡夫のはかなさには、遠く西方十萬億土の彼方に求めようとする。實に佛陀の覺りも、常に釋迦如來の成道や、六度萬行を修して、三僧祇百大劫の修行を経た後のこと、ばかり思つて居るから、目の前に在る者まで見えぬのである。昔し婆修盤頭尊者、常に一食不臥六時禮佛、清淨無欲にして衆人の爲に尊敬されて居る。時に闇夜多尊者、其偏見を度してやらうと思ひ、先づ衆人に問うて言ふようには、「此の偏行頭陀、よく梵行を修す、佛道を得べきや」と。衆人答へて云ふよう、「我が師精進なり、何としてか佛道を成ぜざらんや」。尊者笑つて曰く、「爾が師は道と遠し、設ひ塵劫

を経るも、皆な虚妄の本なるのみ。衆人曰く、「然らば尊者何の徳行を蘊てか、而も我が師を譏る」。尊者對へて曰く、「我は道を求めず、亦顛倒せず、我佛を禮せず、亦輕慢せず、我長坐せず、亦懈怠せず、我一食せず、亦雜食せず、我知足せず亦貪欲せず、一心に希ふ所無し、之れを名づけて道と言ふと。敢て道を求めんとするにあらず、自らその道を得て居る故に、其の道のまゝに行ふを以つて上々とするのである。寒山子は天上の月を食つて、掌中の珠を失却すと吟じた。『華嚴經』如來出現品には、「佛子如來の知慧徳相、處として遍からざる所なし、何を以ての故に、一衆生として、如來智慧を具有せざる者無ければなり。但だ妄想顛倒の執着を以つて、而も證得せず。若し妄想を離るれば、

一切智、自然智、無碍智、則ち現前することを得と説いてある。衆生顛倒妄想によつて、この最も近き我が心中に、悲智圓滿の如來佛陀の在すことを知見しないのである。之れを憐愍して、今遠く求むるはかなさよと歎げかれたのである。

喩へば水の中に居て

渴を叫ぶが如くなり

此れより後の二行四句は、譬喩を以つて、衆生本來佛なりと云ふ、最初の句を説き開くのである。而して其の譬喩が二つあつて、今は渴者水中に在るを知らざるの譬、後は『法華經』の長者窮子の喩である。凡そ佛を求めようと、あせりにあせる者は、水中に在つて、而も咽喉が渴すると言つて、水を求め廻るやうなもので、自ら佛陀の中に在り、佛陀に圍繞されつゝ、佛を求む

るによく似て居る。昔し大珠惠海禪師、初め修行中馬祖大師に參じた。大師問うて曰く、「正に何れの處より來る」。かう云ふ問は、いつでも地理を離れての間である。然し修行中は然とも思はれないから、「越州の大雲寺より來ましたと、正直に答へた。大師曰く、「此に來りて何事をか求めんとする」。惠海曰く、「佛法を求めたいと思ひまして、參りました。願くばその有り難い所を聽かせて下さいと。大師曰く、「吾這裡一物も無し、何の佛法をか求めん。自家の寶藏を顧みずして、家を抛て外に向つて求むるも、亦得べからず」。惠海禪師曰く、「阿那箇か是れ惠海の寶藏」。大師曰く、「即今我に問ふ者、是れ汝が寶藏、一切具足、更に缺如する所なし、使用自在、何ぞ他に向つて之れを求めんや」

と、親切に指南されたので、恵海禪師も大いに反省する所があつたといふ。今も亦この一問答の意を得て後、この二句を再讀せば、深旨自ら領解し得るであらう。

長者の家の子となりて、

貧里に迷ふに異ならず。

此の二句は、『法華經』信解品に出て居る所の、有名なる長者窮子の譬喩である。故に今冗長の嫌あれども、その譬喩の大要を語りませう。

或る都に一人の長者があつた。金銀、碑磔、碼碯、眞珠、瑠璃等の多くの寶を藏つて居て倉庫は幾棟となく立ち並び、其の嚴めしい門内には、多くの象、馬、牛、羊の類を養ひ、奴婢僮僕の傭人も多ければ、輦輿、車乘等の備もあつて、殆んど王者

に等しき住宅を構ひ、其の勢力も亦その都府を壓し、國をも動かすと云ふ位であつた。

金銀財寶は山ほどあつても、死出の旅路につゆ役立たぬ。乃て昔し山上億良と云ふ歌人は、『まされる寶子にしかめやも』と詠じて、これらの財寶を譲るべき子供の無いほど世にあはれなることはないと言つて居る。今此の長者、會て子供を有つて居たのであるけれど、幼くして家を出て、早や十數年に及び、年々歳々秋としなれば、必ず雁は歸り來れど、何等の玉章をも齎さず、旦暮我子の安否を念ひ煩ひて、人知れず胸を傷め、雪降る冬の黄昏、積る白髪を撫てる毎、財寶山と積み置けど、之れを譲り與ふべき子供もなく、空しく心を勞はすばかりであつた。

「我今眞實の我子を得て、總ての寶を譲り與へたなら、どんなに楽しいことだらうと、同じ思ひを繰り返し、我が子の上を憶はぬ日とはなかつたのである。

或る日長者の門前に、いと汚れ果て、而も破れ裂けた衣を着けたる窮子が立ち寄つた。之れこそ長者の朝夕求めし寶子であつたのである。窮子幼き時父を捨て、他國に往き、遊び巡りし其の果ては、衣食に苦しみ、四方の國々を經巡りて邑より邑、市より市と生業を求め、多くの春を迎へ秋を送り、はしなくも父の住めるこの城下に來たのである。されど固より父が此の城下に居らうとは、夢にも知らぬ。そは父も我が子を求めに求め、川を渡り山を越え、尋ねあぐみて此の城下に來り、足を留めて

住む中に、城下第一の長者となつたのである。窮子門の方より遙に屋舎を覗けば、主と覺しき人ば、美しき寶帳の下、金銀寶珠を鑲めたる獅子座の上にあつて、諸人に侍衛され、四方には璽路を垂れ下げ、王者とも見まがふばかりであつた。窮子今長者の威徳に恐れ、これ王か、さらずば王に等しき者であらう。斯る貴人は我を俯ひ呉れぬであらう、貧里に行くに越したことはない。此處等に長く居たならば、咎めを蒙り、却つて禍を招ぐであらうと思ふより早く、逃げるが如く馳出したのである。長者遙に此の様子を見て、日頃尋ねし甲斐ありて、奇しくも我子は巡り來しよと思つたけれど、悦ぶ色をおし隠し、侍者に命じて、彼の窮子を捕へしめた。侍者走り出て、窮子を捉ふれ

ば、彼大いに恐れを懷き、頻りに許されんことを請うた。侍者強て捕へ行かうとすれば、必ず殺されるのであらうと思つて、悶絶して地に倒れてしまつた。長者この様を見て、彼を救し放つと命じ、窮子は喜んで立ち上り、貧里を指して行つて仕舞つた。

此の時長者窮子を誘導しようと思つて、見目形醜陋なる奴僕を遣はして、窮子を傭はしたのである。汝は我等と共に雇はれて、彼の長者の屋敷に行き、掃除の役を爲ようてないか。あの長者の家では、他より二倍の賃金を拂ふ。斯んな善い口は、優曇華の咲くまでありはしないと誘はれる言葉に漸く従ひ、兎も角窮子は長者の家に雇はれたのである。長者或る時窓から糞穢

を掃除する有様を見て、自ら求めて卑しき業をする我が子を憐み、長者も泥土に汚れた弊衣に着更へて、窮子に狎れ近かうとつとめ、窮子も次第に馴れて、長者は窮子に近寄ることが出来た。

「汝は永く此處に居りて、他處へは行くな。其の中には賃錢も増して遣はさう、足にも香油を塗れよ、酒も飲めよ、好める物は取りて喰へ、着更も遣らう、縫もやらう、心置きなく皆取れよ。我は汝を愛するぞ。我は年とりて頼むべきものが無い、汝の如き年若き者は頼みとなる。我を父の如く思へ、我も汝を子の如く思はう、きつと眞實の子の様に思ふであらう。是れより後は、長者窮子と呼ぶにも、我が子と呼び慣はし、情

け深き言葉をかけたものであるから、今は窮子の心も解けて来た。「魚心あれば水心あり」とやられて、長者の親切が、窮子に徹し、窮子の心を動かし、長者の居間にも出入するやうになつたのである。

其の中に長者は病氣に罹つて、自ら久しく生を保ち難いことを知り、窮子を呼び寄せ、他人を退け。

「我が子よ、我は久しからずして、此の世を去るであらう。我は今日我が一切の寶財を汝に與へるであらう。汝は實に我が子であるぞ、いざさらば。」

と言ひつゝ、窮子導きて倉庫に入り、一切の財貨珍寶を檢め、今日より後は、この財貨珍寶は、盡く汝が有である。汝は亦

長者となつて、この寶を失なはぬように注意せよ。」

と諭すけれど、窮子は半信半疑、なほ長者の子であることを信ぜず、たゞ夢心地であつた。是の様子を見て取つた長者は、翌日國王、大臣、百官、長者、居士、其の他城内の有力者を邸内に招待して大宴會を開き、其の席上に於て、長者多くの來賓に對ひ、此の窮子を指して、

「此に聚り給ふ國王陛下を初めとし、朝野の貴顯紳士諸君よ、此の兒は是れ眞實我が子であります。我素或る城下に住ひましたが、この子を失ひましてから、山を踰え川を渡り、尋ね尋ねてこの城下に來ました。然るに父子の因縁淺からで、復び此にこの子と邂逅ふことを得て、今日之れを貴顯紳士諸君

の前に披露することを歡びます。今日より以後、我が富は總て、此の子の有てあります。我れ一切の寶藏を開いて、この子に付與しました。

と宣言した。窮子長者の言葉を聞き、初めて夢から覺めたやうに、今迄の疑心全く晴れて、此の長者は眞實我が生の親なることを覺り、

我もと貧しくして、意志下劣であつたが、今は嬉しくも父の許に在りて、多くの珍寶舍宅を獲て、皆な悉く我が有となつたのである、

と、未曾有の思ひをなしたといふ。

之れが所謂長者窮子の譬喩であつて、迷ひに迷ひを重ね、六

道の貧里をさまよふ者は、即ち吾等である。衆生本來佛なることを知らぬから、自ら求めて貧里に迷ふのである。若し吾等一度び佛陀の子であることを自覺したならば、自利々他の功德の寶藏、皆な吾が有となるのである。然るに容易に衆生本來佛なることを知らぬから、長者の子でありながら、自ら好んで貧里に迷ふと、少しも異ならぬのである。

六趣輪廻の因縁は、己が愚知の闇路なり、

闇路に闇路を踏みそへて、いつか生死を離るべき。

此の四句に就いてお話をするには、自然教相的説明を加へねばならぬ。依つて初に教相的説明を施し、後に宗旨の眼を以てお話しませう。六趣輪廻の因縁を調べて見るに、愚痴の煩惱が其

の根本原因となるので、この愚痴の煩惱さへ斷ち截れば、生死を離れることが出来る。さて六趣とは六道とも言つて、十界中では下六界に當るのである。即ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、之れを下六界と云ひ、迷界に屬してゐるのである。又聲聞、緣覺、菩薩、佛、之れを上四界と稱し、悟界に屬するのである。固より佛界は悟の極で、佛界に至ることは、吾々の理想である。扱て其の六趣に於ても、車の輪の廻り轉りて果しなきが如く、或は人間に生れ、或は人間から畜生、畜生から天上、天上から修羅と云ふやうに、此處に生れては彼處に死し、彼處に生れては此處に死すと云ふやうに、生れ代り死に變りする有様を、生死輪廻の有様とも云へば、輪廻轉生とも云ふので

ある。この生死界に輪廻轉生する原因は、全く愚痴の煩惱である。愚痴とは、おろか「たわけ」と云ふ文字で、眞理の光明を認承し得ない無明のことである。即ち無明と云ふ愚痴の煩惱を原として、行と云ふ行爲が生じ、無明と行とが因となつて、次の世に識を母胎に托する。識を母胎に托すれば直に名色と云つて肉體が出来かゝる。識は精神で名色は肉體、之れて漸く形が揃ふと、六所と云つて、所謂六根が出来、胎内十箇月の日數を重ねて、此の娑婆世界に生れ出づるのである。一度び娑婆の風に觸るれば、茲に之れを受け込みて、亦煩惱を起し始めるのである。外界萬境に接觸すれば、六根に依つて、六識を働かし、或は瞋り、或は貪り求め、可愛の者に對ては貪慾を起し、非愛の者に向つ

ては瞋恚を生じ、茲に憎愛の煩惱頻りに働くのである。而して之れ皆な前生無明、行の煩惱に因つて得たる結果である。此の時に當つて聖法に遭ひ奉り、聖教によつて煩惱を斷滅すれば、清淨なる身心となつて、本有佛性を開覺し、即身成佛の素懷を遂ぐる事が出来るのであるけれど、遇ひ難き聖法に遇ひながら、聖法を信受せざるに因つて、再び次の世に迷の世界に生るべき原因たる煩惱を起して已まぬのである。是に於てか、とても次世は六道迷界より免るゝことの出来ぬ原因を取り有する身となるのである。凡そ原因あれば必ず結果あるの眞理は、動かすとの出来ぬ所で、遂に再び迷界に生れ、亦復煩惱を起して次世迷界に生ずべき原因を作りつゝ、老死するのである。かくて

は環の端なきが如く生死を重ねるので、其の根本は愚痴無明の煩惱より生ずるので、此の無明より、行、識、名色、六所、觸、受、愛、取、有、生、老死と縁起する、三世兩重の因果を表出して、十二因縁と云ふのである。さてこの十二因縁に依つて死んで生れ、生れては死ぬるのも、人間界ばかりのことではない。固より人間界の中に於ても、此の現世の造業に因つて、次の世には、或は長者と生れ、或は貧困者と生れ、或は貴賤美醜等の差別を生ずるのである。若し夫れ現世に於て畜生にも等しき行爲を取つて耻ぢざれば、遂に畜生道に生るべき因を成し、死後は畜生道に生れるのである。乃至修羅、天上、餓鬼、地獄、たゞそれ原因に依つて、其れ相當の結果を引き、或は地

獄に墮し、或は修羅道に生るゝのである。之れを六趣輪廻とも、輪廻轉生とも云ふのである。要するに、六趣輪廻の因縁は、己れが愚痴の闇路より起るのである。

偕て次に禪門の眼を以つて之れを觀れば、元來六趣六道と云ふやうな世界は、決して箇立的に存在して居るのでない。皆な之れ各自の心柄より建立するのである。即ち吾々の心は、本來佛となり得る性を有して居るけれど、其の心に愚痴の黒雲立ちかゝる時は、其の心が、直に修羅を生じ、又一變して地獄となり、餓鬼となるのである。即ち善惡共に、吾々の心に薰じて、其の薰習を受けし心は、其れ相當の境遇を現變するのであつて、實には地獄も天道も、此の娑婆界を離れて存在するのではない。

皆な己が愚痴暗昧の心より生ずるのである。故に心は本體の如きもので、其の心の本體の影として現れたのは六趣であるから、先づ此の心の本體を開覺し、愚痴の闇路を除却すれば、此の土は光明赫々たる淨土界となり、此の身この儘佛陀となるのである。これを即ち直指人心見性成佛と云ひ、宗門第一義とする所である。然しこれ等は單に理屈として明めたとして、更に其の心の黒雲は拂はれない。奮然、靜坐して、精進に其の心を實究し、修行に修行を積み重ねなければならぬ。若し眞參實究の功を積む時は、或る一縁に觸れても、頓に悟入することを得るのである。

又路闇に闇路を踏みそへて、いつか生死を離るべきの二句は、

其の心の儘に放任して置かば、煩惱は煩惱を重ね、吾々の心は益々迷雲に覆ははれて、遂に生死の迷界を脱出することが出来ぬ。故に先づ眞參實究を要すと、反面より修行を勧むるのである。凡そ佛法に於ては、修行に二種の差別あつて。一を自利の修行とし。他を利他の修行とするのである。この自利々他の修行成就四満したる所は、即ち佛陀である。而して自利の行四満成就すれば、利他の行は自から備るべきである。即ち上求菩提は自利に當り、下衆生は利他に當るのであつて、今は専ら上求菩提の自利の行を勧むるのである。然らば如何にして生死迷界の闇路を脱出して涅槃悟界の光明國土に到らるゝてあらうか、今暫く『夢中間答』を以つて、此の問題を解決することにしよう。

問ふ。曲れる物を押しなほせば直になる如く、凡夫の妄心の邪僻なるを、修練して正直になせば、佛心とこそなるべしと覺ゆるを、妄心は第二の月に同じとて、一向に嫌ふことは何ぞや。然し、然らば、凡夫の佛に成ることはあるまじきにやあらん。

答ふ。此の疑は是れ『圓覺經』の普賢菩薩の疑なり。『首楞嚴經』の中に、阿難も亦此の疑を生ぜり。佛阿難に告げて曰く、「汝本心を失うて盧知分別の心を認めて、自心と思へり、此れは汝の心にあらず。阿難疑うて曰く、「六道に輪廻することもこの心に因れり、乃至佛果を得ることも、亦此の心に因るべし。

然るに此の心若し我が心にあらずば、何をもつて佛果を成ずべけんや。若し此の心無くは、土木瓦石と何を異ることあらんや。佛言く、汝が心をあさへて無しと思へと謂ふには非ず。汝が心と思へるもの實に有るものならば、必ず有る所あるべし、何れの處にかあるやと問ひたまふ。阿難始めは此の心は身の内にありと答へ申さる。佛汝が身の内にも、此の心なき由を責め給ふ時、阿難白く、身の外にありと。佛又之れを然らずと責め給ふ時、阿難斯の如く七處まで指し申さる。最後には、我が心は内にあるにも非ず、外にあるにも非ず、中間に在るにも非ず、一切無著なるは、我が心なりと述べられき。然るに佛皆之れを許し給はず、此の故に阿難茫然とし

て分別する所なし。爾時佛言く、「一切衆生無始より以來、妄りに輪廻を受けたることは、本心を失うて、慮智の心を認めて、我が心と思へるに因れり、是の故に偶々佛法を修行すと雖も、二種の根本を知らずして、錯りて修行する故に、二乗外道及び天魔の境界に墮つ。二種の根本とは、一には本覺妙明、元清淨の體なり、此れは是れ衆生の自身の本源なり。此の根本を忘失せり。二には無始生死の根元なり。則ち汝が今諸の衆生と、攀縁の心を用ひて、自性となす者、則ち汝が慮智分別を認めて自心と思へるものなり。若し此の心を以つて修行せば、輪廻の業となるとも、本源に到ることあるべからず。譬へば砂を煮て飯となさんと思ふが如し。假令劫數を

經るとも、熱砂とはなるべし、飯とは成るべからずと云云。
 この問答にある如く、吾々は本心を失つて、吾々が徒に思慮分別する心を認めて、本来の心とするから、迷を重ねて六道に輪廻するのである。其の本心本覺を現はさずして、思慮妄想の分別心を以つて、修行しても、勞して功なきのみならず、遂に六趣の闇路より脱出することが出来ぬ。六趣の闇路に闇路を踏み重ねてはいつ生死を離るか、覺束なきことである。要は急々に、この思慮妄想の分別心を棄て、本覺の本心に立ち還るに在るのである。而して其の本覺に立ち還るに就いては、如何なる修行が最も捷徑であるかと云ふに、茲に坐禪の一行があるばかりである。

それ摩訶衍の禪定は、

稱歎するに餘あり。

佛敎には無量の法門あつて、難易問難して居るけれど、若し此れを大別すれば、大乘の敎と、小乗の敎との二門となる。大乘は其の智慧開けたる大人の乗り物で、小乗は未だ其の智慧も十分開けざる小人の乗り物である。禪那即ち禪定にも、種々の差別あつて、外道も其の眞似を致せば、小乗の機亦之れを倣ふ故分、邪正曲直のあることは、序辯に聊か述べて置いた。眞正の禪定は、たゞこの摩訶衍即ち大乘至極の禪定ばかりである。此の大乘眞正の禪定に至りては、稱歎するに餘りありて、是れを眞實修行する者は、愚痴の闇路自ら開けて、本覺眞如の靈光を放ち、無量の福德自然に顯はれ來るのである。然れども其の修

行熱烈にして一向にあらざれば、其の修する所の禪定も、亦外道禪に墮し、小乘禪と化して仕舞ふのである。其の修行功德無きのみか、却つて之れ迷を重ね、愚痴の闇路を増すばかりである。故に無門慧開禪師は、「規に循ひ矩を守るは、無繩自縛。縦横無礙なるは外道魔軍。心を存して澄寂なるは黙照邪禪。意を恣にして縁を存するは、解脱の深坑。惺々として味からざるは、帶鎖擔枷。善を用ひ惡を思ふは、地獄天道。佛見法見は二鐵圍山。念起即覺は弄精魂漢。兀然として定を習ふは、鬼家の活計。進む時は理に迷ひ、退く時は宗に乖く、進まず退ぞかざる時は、有氣の死人。且らく道へ畢竟して如何んが履踐せん」と垂示されて居る、如何にも親切なる垂示である。若しそれ等邪曲

禪を離れて、摩訶衍の禪定に依つたならば、この腕を屈伸する暇もなく、頓に本覺を開くことが出来るのである。又「拔除法語」にも、「僧あり出て云く、某既に空定を得たり。師云く汝云く、空定如何んが得たるか。僧云く、坐中に常に紛飛の念をさまり盡きて、内外齊しく晴天の如し、此の時吾が身心、本來空なること疑はず。師云く、是れ空定にあらず、只是れ學道人の人々が起す所の、最初の空見なり。此の見の人若し眞正の善知識に逢はざれば、因果を撥無して地獄に入ること箭の如し。空定と謂ふは、見性通達して、色、受、想、行、識等の五蘊皆盡く空劫して、一切の煩惱盡き、智見亡じ、觀照絶し、心所滅し、應用蹤跡なくして、衆魔も侵すべき便なく、佛眼見れども見え

ざる、穩密全眞の境界是れなり、と言つてある。禪定を修行しても、眞實此の五蘊空劫して、一切の煩惱盡き、智見亡じ、觀照絶し、言ふて言を留めず、逝くに足跡なしと云ふ位になつて、天魔も侵すべからず、佛眼も見能はずと云ふ境界に立ち至らねば駄目ぢや。若し此の境界に至つたならば、佛を誹り法を譏るも、罪を得ず、其の身其の儘大光明を放つ佛となるのである。是に至つてこそ。大乘の禪定と稱歎するに餘りありと謂ふべしぢや。

布施や持戒の諸波羅蜜、
其の品多き諸善行、

念佛懺悔修行等、
皆此の中に歸するなり。

此の四句に於ては、諸善行を擧げて、大乘禪定の勝れたるを顯

はすのである。先づ第一句に於て、六波羅蜜を示すので、其中布施と持戒だけを、句の都合で出したのであるけれど、之れは六波羅蜜、即ち六度である。かゝる示し方を影略互顯と云ふ。六度は固之れ菩薩が佛果を求めるために修する所の行で、波羅蜜を譯して到彼岸と云ふ。迷の岸より悟の岸に渡ること、其の大河を渡るには、六度と云ふ舟に依るのである。六度とは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つである。先づ最初に布施とは、施しをすることであるが、之れも委しく説けば、財施と法施と無畏施との三通りに分れるのである。凡そ布施は善根の根本であるから、この六度の最初に置かれたのである。第一に財施とは金銀財貨飲食衣服等の財物を施すことある。大寶

『積經』に施法を行ずるに、「酒及び毒藥、罝羅弓、矢刀杖等を施さず」とあつて、有害危険物は施さぬことになつて居る。又『地持論』には、「不淨の飲食、弟唾の汚食、殘餘の食等を出家に施さず」と説いてあつて、己の厭ひ嫌ふやうなものは、之れを施さぬことになつて居る。これは然もあるべきことで、孔子が己の欲せざる所、之れを人に施す莫れと云はれたのと應じて居る。又龍樹論師の『智度論』には、「不平等の心を以つて施さず、施すに嗔からず、施し已つて悔まず」とある。凡そ施をする位なら、嗔り腹立の心で施したり、或は布施した後に悔い惜むなどいふことあらば、其の布施の功德の消滅し去ることは、言ふまでもないことである。斯くの如き類文は諸經論中には甚だ多くて、

一々其の非行を誡めてある。即ち『優婆塞戒經』には、「他を惱まし、掠め取りし非理の物は、佛及び父母師僧に施さずと説き、『增一阿含經』には、「遠來の人、遠去の人、病人及び饑世の人持戒の人には施すべしと示し、其の續きの文には復次の寒凍の人には温室、衣服、薪火、食等を施し、熱惱の人には涼室水扇等を施すに皆福あり」と、細き所まで諭されてある。第二に法施とは、求道の人に向つて、解脱の大道を、方便解説することである。故に之れは、出家より在家に施す布施であつて、この生死迷界を脱出せしむるために、方便を用ひて説法することである。この法施の功德も亦大なるものであつて、『智度論』には、「一切施中、法施を以て第一とすと説いてある。又『大集經』に

依れば、施寶多しと雖も、心に一偈を誦持するに如かず、法施最明にして、飲食に勝過すと、法施の功德の勝れたることを示し。『未曾有經』には、「飲食は一日の命を救ひ、財寶は一世の乏を濟ふも、皆繫縛を増すのみ。說法教化は法施と名づく、衆生をして世間の道を出離せしめ、永劫の苦輪を濟ふと説きて、同じく布施の功德は法施を以つて、最上とすることを明してある。第三に無畏施とは他の危難に遭遇し、逼迫苦惱する時に當つては、吾が身命を顧みず、堪忍して往いて之れを救済すること、所謂吾が無畏心を施すことである。法畏は畏ること無しと訓みて、吾が身命を惜む者は、無畏心を有たないけれど、吾が身命を惜まざる者には、この無畏心があつて、他の爲に能く之れ

を施すのである。孔子は義を見て爲ざるは勇なきなりと教へられたが。孔子の所謂勇氣は、今の無畏心に當るのである。蠻勇や、匹夫の勇は無畏とは言はれぬけれど、義の爲に進んで之れを行ふは、眞實の勇氣であつて無畏心より起るのである。而して其の危険災難より救ひ出して、安穩ならしめ、而も更に其の報酬を求めざるを無畏施といふのである。固より人に物を與へて、報を求むるやうな行爲は布施とは言ひ得ないのである。譬へば露國滿洲の地を壓し、韓國をして危地に陥る、時に當り、我が國民は韓國の窮状を見るに忍びず、無法なる露國を懲しめてやらうと、身命を賭して、滿韓の野に血の雨を降し、日本海をして血海となすに至つた、大和魂なる大精神の發動するもの

皆此の無畏施から起るのである。斯の如く、布施に三種の別があるけれど、布施する時の精神は、慈悲正直にして、敢て名利の爲めにせず、又更に報酬を望まず、己の有つ物を以て施を行ずるのである。若し斯う云ふと、我は貧困にして布施を行ふことが出来ぬと言ふ者もあらうけれど、之れに就いては、佛既に教誨して置かるゝことがある。即ち自ら施すべき物なくとも、他の施すを見て、隨喜すれば、亦自ら布施した功德と同じである。又物が無いからと言つて施さぬのは、物なきがためではなくて、志が無いからである。若し布施の志さへあつたなら、一水一草と雖も、之れを佛菩薩に向向する時は、其の功德廣大なるものであると、『優婆塞戒經』に説いてあるのである。

六波羅蜜の中、布施波羅蜜の物語が永くなりましたが、第二は持戒波羅蜜で、之れは佛の制定して置かれた所の戒律を持つて、善根を重ね、其の善根に依つて、涅槃の佛果に至らうとするのである。凡そ戒法と云ふのは、止惡作善で、惡事を防遏して、善事を行ずるを要とするのである。之れにも在家の戒法、出家の戒法、或は比丘の戒法、比丘尼の戒法と云ふやうに、種の區別が有ることであるが、今とても一々に就いて申し述べては居られぬ。依つて今十善戒と云ふ、通俗戒法に就いて、其の大略を申し述べませう。十戒とは、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不綺語戒、不惡口戒、不兩舌戒、不貪欲戒、不瞋恚戒、不邪見戒の十戒法で、初の三戒は身業に就いての戒、

次の四戒は口業に就いての戒、後の三戒は意業に就いての戒である。かくて身口意の三業を情淨にすれば、善根之れより大なるはないので、佛果も之れに因つて得られるのである。殺生は悪いと知つたなら、其の殺生を止め慈悲心を生ずるのは、不殺生戒である。偷盜は固より悪事である、有形の物を偷み、無形の恩誼等を偷むも悪いことと知つたなら、他人の物は塵一ぎれも盗まないやうにするのが、不偷盜戒である。他人の妻を姦することは勿論罪悪であるが、其の他處女を姦するのも善い事では決して無い。設令自分の妻と雖も、非時非處に於て、姦を行ずるなど慎むべきことで、凡て之れ等の邪淫を止むるを不邪淫戒と云ふのである。虚言は吐きて他人を欺き惑はすも、亦罪惡

であるから、之れを止めるのが、不妄語戒である。又口は禍の門で、冗談戲言をなして居る間に、随分人の感情を害し、意外な結果を生ずるものであるから、綺語も慎みて、餘計なことを言はぬのが、不綺語戒である。或は人の悪口をする、誹譏すると云ふことは、尙ほ更慎むべきことで、之れを慎みますことを、不惡口戒と云ふ。兩舌とは、俗に言ふ二枚舌を使ふことで、甲の人に言ふこと、乙の人に言ふこと、は相違して居る。之れは主として、甲乙二者の間を、中傷離間する時に行はるので、離間語とも言はれて居る。此の中傷離間の悪事たることを知つて、之れを慎み止むるを不兩舌戒と云ふのである。次に貪欲と云つて、名を求め、利を貪り、只管名利欲のために、義を破り

禮を缺いて居るのは悪事であると知つて、之れを止むのが不
 貪欲戒である。又瞋り腹立つといふことも、口業身業の罪惡を
 起す原であるから。之れを慎み止むるのが不瞋恚戒である。以
 上の九戒法に反對した所の行爲思想は、元來邪見といふ煩惱よ
 り生ずるので、邪見は愚痴の煩惱より生ずる故に、其の根本に
 約して説くこともある。邪見とは因果の道理を信ぜざるのみか、
 因果の道理を撥無するのである。因果の道理を撥無する故に、
 諸の罪惡之れより生ずるのである。然れば因果の道理を信じて
 正見に住すれば、以上九種の罪惡を起すこともないと、深く之
 れを覺つて、邪見の煩惱を一刀兩斷に斷つて仕舞ふ、之れを不
 邪見戒と云ふのである。斯くの如く其の根本たる邪見を斷へせ

ば、他の九戒も容易に持ち行ふことが出来きて、涅槃の都にも
 遊ぶ事が出来るのである。故に之れを持戒波羅蜜と稱して、到
 彼岸の一方便修行とするのである。

本文には以上述べた布施と持戒とを出してあるばかりである
 けれど、其の他の波羅蜜をも攝して居ること申すまでもない。
 第三の忍辱と云ふは、一切順逆の境に對して、耐へ忍ぶことで
 ある。菩薩大悲を行じて衆生を救済する時は、設令火の中水の
 中をも厭ふことなく、身を置いて救済すると云ふ如きは、忍辱
 の最上を示したものである。『大集經』には我今諸の菩薩の行を修
 學す、菩薩行中、忍辱を最となす、持戒苦行も及ぶこと能はず
 と稱歎してある。第四は精進、此の精進と云ふことは、今日で

は其の意義大に轉じて、唯だ魚肉を食はぬこととして居るけれども本来の意義は決して斯く狭い意義ではない。精進とは菩薩の不退轉心の事、他心を間雑せず、一向一心になつて、其の行を勉強努力する、所謂拮据黽勉の状態を意味するのである。然れば不殺生に就いても精進なれば、不偷盜に就いても精進、乃至十戒受持修行するに就いて精進である。現今精進料理など稱するすら可笑しいのに、精進料理に刺身に擬したものや、鰻焼に擬した料理を調理して、法事の席に出すなど、却つて滑稽である。次に禪定は前にも言つた通り、禪即定で、禪那のことである。然し之れは前に出た摩訶衍の大禪定とは違ふ。之れは他の諸波羅蜜に對した禪定であつて、摩訶衍の禪定は絶対的の、

大禪定である。今の禪定は次の智慧を生ずる本となるので、慮凝心するばかりである。次の智慧は禪定に依つて得た智慧であつて、智慧にも聞慧、思慧、修慧と云ふ區別もあるか、生死海を渡る船筏となるものは智慧である。又無明の闇路を照す燈炬もこの智慧で、一切煩惱の樹を伐る利斧もこの智慧である。然れば六度は菩薩の修行であつて、此の修行より得る所の善根功德は廣大であるから、この善根功德に依つて、生死の迷界より、涅槃の悟界に至られるのである。

次に念佛、懺悔、修行等と、功德善根の多いものばかりを列べ挙げた。念佛にも觀念の念佛と、口唱の念佛とがあつて、自力宗と他力宗とて異つて居るが、大體自力宗では觀念の念佛を

修し、他力宗では口唱の念佛を信じて居る。觀念の念佛とは、禪定に依つて、佛土の莊嚴を觀想し、次いで佛の國土に在ます佛陀如來を觀想し、佛陀の智慧と慈悲とに倣つて、無上の智慧を起し、佛陀と同體の覺を得て、衆生を救濟しようとするのである。然れば觀念の念佛も、亦偉大なる善根であることは、無論である。口唱の念佛と云ふ時は、聲に出して口に佛名を唱ふるのであるが、其の佛名中には萬善萬行を具足して居るから、此の佛名を唱ふれば、自然に其の萬善萬行を身に受けて、極樂に往生するに間違なき身となることを信じ、極樂淨土に往生して後に、佛果を得ると云ふのであるから、念佛其の物に、既に善根功德を具足して居るのである。淨土眞宗などの教は、他力

教であつて、此の口唱念佛の功德を信受して、之れを聲に出して唱ふるのである。故に念佛は觀念の念佛でも、口唱の念佛でも、共に大善大功德を具足して居るのである。懺悔は文字の上では梵漢兼稱の語で、梵語では懺摩と云ひ、譯して悔過と云ふべきを、梵漢兼稱して、懺悔と云ふことになつて居る。而して懺悔とは堪忍して罪惡を犯さぬやうにすると云ふのが本義で、又既に犯した所の、罪惡を、悔ひ改むると同時に、將來に於ては、復ひ此の惡事をなして、罪惡を作らぬと云ふ意義もあるが、現今は専ら後義の方を採られて居る。而して其の懺悔にも三品の懺悔と云つて、懺悔の仕方にも、輕重三種の別ありと古人は説いて居るが、今は一々申し立てぬ。要するに懺悔は善根の一

てあつて、懺悔する者は、自然に懺悔の功德に依つて罪惡を消滅し、佛果に至られると云ふのである。

さて上來陳べ來つた、六波羅蜜の修行、念佛懺悔等の修行、其の他佛道修行は、實に多端であるから、「其の品多き諸善行」と一切を總括し、其の善根功德の母たる諸善行は、總括された其の儘で、「皆此の中に歸するなり」と、摩訶衍の禪定中に結歸して仕舞つた。否結歸したのではなくて、禪定中には、其の品多き諸善行を、始より結歸して居るのである。「證道歌」に「頓に如来禪を覺了すれば、六度万行體中に圓なり」とあるは、即ち此の意である。先師蒼龍老漢は、「佛の修する六波羅蜜とは、是れ見性成佛の義なり。布施と云ふは自性の靈光萬機を照し、應用普

く施し。彼に在つては彼に同じく、是れに在つては是れに同じくして、餘ることなく、缺くることなき是れなり。持戒と云ふは、佛性固より清淨にして、六根の主なりと雖も、六塵に染まず、是れを悟る者は自然に身心相應して、正戒の相をも取らず、邪念の心をも起さざる是れなり。忍辱と云ふは、佛性無爲にして、我人の相に干からざるが故に、是れに相應する者は、謗れども怒らず、讚れども喜ぶ心なき是れなり。精進と云ふは、佛性元より衆徳を備へて一切の功德を成就し、萬物を生育し、未來際に透りて滯ることなき是れなり。禪と云ふは、佛性眞常にして、動靜の諸相を離れ、宗を超え、格を出て、聖凡の位に落ちず、文字に拘はらず、善惡の量に泥まざる是れなり。智慧と云ふは、

佛性獨り明かにして、萬機を照し、普く聖凡の眼となること、日月の世界を耀すが如くにして、古に亘り今に匝りて、邊際なき、眞の淨光是れなり。是の故に自性の妙用極りなきこと、大海の波瀾のごとし、一性の中に六般の神用あり、是れを佛の六波羅蜜と名づく、是れ有相の所行にあらず。若し人一性を悟れば、六波羅蜜を成就すと説かれたが、眞に格言と言ふべしぢや。吾々はこの一性を具足して居るけれど、此の一性を見極めず、之れを開覺せざるが故に、佛果を得ることが出来ぬのである。然しながら、今此の摩訶衍の禪定を修行すれば、此の一性を見極め、之れを開覺して、即身成佛すること疑ひないのである。依つて次に禪定の功德念佛懺悔にも勝つて居ることを説いてあ

る。

一座の功をなす人も、

積みし無量の罪ほろぶ

此の二句は坐禪の功德を述べるので、先づ懺悔滅罪に對して、坐禪の功德を擧げたのである。凡そ坐禪を修するには、時間の長短を論じないので、唯悟を開くを要とするのである。故に一日の坐禪は一日の佛で、一座の坐禪は、一座の佛であるとも古人は言つて居られる。然しながら、坐禪をすると言つても、只黙然と坐つて居つても坐禪にならぬ。さうかと云つて、妄念妄想紛起する心を以つて、ドン坐つて居つてもまた坐禪にならぬ。無念無想でも坐禪にならぬ。有念有想でも坐禪にならぬ。至心に佛を求め、專念に坐禪して初めて眞の坐禪と云ひ得る。之れ

も初心の者は、『坐禪儀』に説いて有るやうな作法に依つて、至心専念に修行せねば、到底眞實の坐禪にならぬのみか、見性など以つての外のことである。固より上根上智の者は、敢て作法通りの坐禪を行ぜずとも、功德は自ら顯れ來るのであるが、普通凡庸の者は、規定の作法に依らねばならぬ。若し眞實の坐禪が出来るなら、假令一座の坐禪でも、過去久遠劫より造り來つた罪惡を悉く消滅し盡すことが出来る。昔し二祖慧可大師、法を達磨大士に稟けて、大に玄風を闢きつゝ居つた時に、北齊の天平二年に、一人の居士來つて、慧可大師を禮拜した。其の年の頃は四十を踰えて居つたであらう、名氏を告げねば何れの者とも分り難い、居士合掌して大師に問うて曰く、「弟子の身風恙

に纏はる。請ふ和尚、我が爲に懺罪し給へ」。大師答へて曰く、「罪を持ち來れ、汝が爲に懺せしめむ」。居士良久して曰く、「罪を免むる不可得なり」。大師曰く、「汝が爲に懺罪し意んぬ、宜しく佛法僧に依りて住すべし」。居士曰く「今和尚に見えて、已に僧なることを知る、未審何をか佛法と名づく」。大師曰く、「是心是佛、是心是法、法佛不二なり、僧法も亦然り」。居士曰く、「今日始めて知る、罪性内に在らず、外にあらず、中間にあらざることを、是れより病頓に癒ゆと云ふことは、『傳燈錄』に出てある。是れに由つて之れを觀れば、この居士固より上根上智の者にて、既に修行を重ね來つた者に相違ないが、これ等は事實の上にて罪惡消滅し、而も肉體的に病氣が直つたと云ふてないか。然

れば一座の坐禪の功と雖も、決して空しいものではない。其の功德の廣大なると思ふべきである。

惡趣いづくにありぬべき、淨土即ち遠からず。

此の二句は坐禪の功德を述ぶる中、念佛の功德に對して、念佛の功德にも勝れて居ることを顯はすのである。念佛の功德は廣大であつても、其の念佛の功德に依り、不退轉の位に住して、死後極樂淨土に往生して、十萬億土を過ぎた西方に往き、初めて佛果を證るのである。故に二世に亘るばかりか、此の世の外に淨土を立て、地獄を立てるのである。惡趣は具に三惡趣と云つて、地獄、餓鬼、畜生の三世間を指すので、極樂淨土に對して居る、然るに今禪宗の見解を以てすれば、心が本である。此

の一心に依つて地獄も出來れば極樂も出來るのである。心次第で鬼ともなれば、佛ともなるのである。古語に心生すれば、種種の法生じ、心滅すれば種々の法滅すともあつて、一切萬法は心の起るに隨つて起り、心の滅するに隨つて滅するのである。若し人、一念不生の境界に住すれば、一切萬法、些の咎は無いはずぢや。阿彌陀如來は、眞に西方十萬億土の遠方に在ますと思ふが、若しそんなに遠方にあるなら、遠過ぎて行かれまい。阿彌陀如來は決して去る遠方に在ますのではない。我が方寸の中に於て、本來の阿彌陀如來が、大光明を放つて居たまふのである。其の阿彌陀如來の淨土と云ふも、無欲無我の心地であつて、一點の塵もなく、其の廣きこと、天地萬物を容れても、尙

ほ餘りあると云ふ有様である。其の淨土の八功德水、水淨くして、目の及ぶ所金銀瑠璃の七寶にあらずと云ふことなしぢや。即ち我が心の中に於て、彌陀も在れば、淨土もある。是れを唯心の彌陀、己心の淨土と謂ふのである。然るに多くは遠き西方の彌陀を信じ、妄想の念佛を頼みて、自性本來の彌陀をば、貪欲の泥を以つて、目口も明かぬやうに塗り寒き、愚痴の袋を被ぶせて。彼の光明を遮ぎり、八功德地の邊には、妄想瞋恚の荆棘を種ゑて、人を害する虎狼を養ひ、惡魚毒蛇は池中に鱗を振ふ。極樂淨土の當體其の儘餓鬼、畜生の栖家となり、鬼共が此處に生活して、種々の苦を受くること隙なし。元來地獄も餓鬼も無いものを、我々が自ら地獄を作り出して此に墮するのであ

る。然るに一念信を起して、内に願み、心を認めて、自性本來の彌陀を拜み彼の貪欲の泥を立派に洗ひ落とし、愚痴の袋を破り捨てる時は、彌陀如來も自由を得給ひて、彼の光明を掲げて、遍く十萬世界を照し給ひ、智慧の利劍を提げて、妄想瞋恚の荆棘林を刈り拂ひ、虎狼のやからも、驅り立てられ、鬼共までが形を隠し、跡方もなく逃げ去れば、地獄の當體、直に元の極樂淨土に立ち還るのである。是れを一念彌陀佛、即滅無量罪と云ひ、我が一念に依つて、彌陀も淨土も、我が心の中に建立することが出来るので、淨土が近いと云つても、之れより近いものは恐らく有るまい、今摩訶衍の禪定に依る時は、自性本來の彌陀や淨土を心中に現じて、一念の中に彌陀となり、即心即佛、

是身是佛の當體を示し得るのである。かく一念に即心成佛をなし得る其の功德は、坐禪を置いて、其の他に決して有りはしない。坐禪の功德の廣大無邊なること、夫れ斯くの如くである。

忝なくも此の法を、

讚歎隨喜する人は、

一たび耳に觸るゝ時、
福を得ること限なし。

此の四句も、坐禪の功德を説くのであるが、之れは正しく聞法の益を示したのである。即ち坐禪は、僅に一坐修するばかりでも一座の佛となり、能く念佛懺悔にも勝れた功德があると云ふ法義を耳に聞いて、厚き信仰心より、此の坐禪の法を讚歎隨喜する者は、福利を得ること限りなしと云ふのである。「禮讚文」には、「人身受け難し、今已に受く、佛法聞き難し、今已に聞く

此の身今生に向つて度せずんば、更に何れの生に向てか此の身を度せん、大衆もろともに、至心に三寶に歸依したてまつるべし等と誡めてある通りである。既に人身受け難くして、人身を受け、佛法聞き難くして、今已に聞いたので、而も其の法は佛法中、禪定多功德の法を聞いたのである。聞くとは淨土真宗などでは、信の義に取つて居るが、唯だ聞くなら、凡そ耳ある者は、悉く聞くてならうけれど、聞くと同時に、之れを信仰しなくては、功德は顯れない。信仰する故に隨喜もすれば、讚歎もするのである、隨喜は、隨ひ喜ぶので、約り賛成と同じ意義である。讚歎は讚め歎するのである。吾々の心は、常に善い物を見にり、善いことを聞いたりして、初めて善くなつて行くので

ある。故にかゝる善い法門を常に耳にすれば、其の功德に依つて、心も善い方へ傾いて行くのである。弘法大師が「悪しきとも、善しとも如何が言ひはてむ、折々かはる人の心をと詠ぜられた通り、吾々の心は、其の境遇に依つて、善惡共に遷り變るものである。儒教に居は心移すと云ふも、今と同じ譯である。昔し天竺に華氏國と云ふ大國があつた、其の國王は一頭の大白象を畜つて居られた。而して若し人民が罪を犯し、國法に觸るれば、此の象をして踏み殺させるのが例となつて居た。然るに或る時此の象部屋が焼失したので、已むことを得ず、此の白象を或る寺の近傍に移して置いた。勿論隣が寺であるから、日夕讀經の聲や、説法の聲が聞える。其の度び毎に、此の白象は耳を

傾けて聞いて居る様子であつた。一日寺僧が「法句經」を讀誦して居ると、例の通り白象は之れを聞いて居たが、「爲善生天作惡入淵」と云ふ語を聞くと、此の象の心は忽ち柔和になつて、慈悲心を起す様になつて來た。是れより後と云ふものは、刑場に出で罪人を見ても、但だ鼻をもて嗅ぎ、舌を以つて舐るばかりで、更に罪人を踏み殺さぬやうになつた。王は此の事實を見て大に恐れを生じ、群臣を集めて、此の事を御下問遊ばされた。處が其の中に、一人の賢臣があつて、王に奏して此の白象は畜類なりと雖も、由來賢き畜生であります、日頃佛寺の近傍に置かるゝに依つて、佛の妙法を自然と耳に聞き入れて、白象の心が柔和になつたのに相違ありません。白象の心が柔和にな

つたのはよいとしても、之れでは一國の刑法が弛みて、國を治めることが出来ませぬ、願くば陛下御聖察の上、此の白象を引き、處を替へて、屠肆の場所に近づけ繋ぎ置かれたが宜しう御座りますと言上した。王は此の言葉を理として、今度は、白象を穢多村の近傍に移された。此處では、穢多が、日々牛を割き、羊を割くを見るばかりであるから、其の心は次第に猛惡になつて、残害更に強くなつたと、經文にも説いてある。動物ですら此の通りである。况んや人間に於てをや。支那では孟母三遷の教訓と云ふことがあつて、教育上大切なことの一例となつて居る。即ち孟子の母が孟子を養育する時、其の家初めは市にあつた、所が孟子が日々商賈の眞似をしたり、豆腐屋や納豆屋の

眞似をして遊ぶのど、此の處は兒童の教育に適しなと思ひ、家を寺院に近き所に遷したのである。然るに今度は寺院の讀經の聲でも聞き分ければよかつたが、當時の支那寺院と云ふのは、未だ佛教の來らぬ前の寺院で、支那道教の寺院であつたか、日葬式ばかりを事として居る。乃て孟子は其の寺院で行ふ葬式の眞似をして、遊ぶのである。孟母は之れを見て、亦此の地も非教育的であると思ふ、今度は宅を學校に近き處に遷して。孟子は學校の側へ來てからは、所謂學校ゴッコをして遊ぶので孟母も安心したと云ふ。かくて孟子は孔子に次いだ賢人君子となつたのである。之れと云ふも、全く孟母の心かけ一つであつたと言はれて居るのである。故に吾々の心は固定したものではな

くて、善に近づけば善、惡に近づけば惡となるのである。倫理學者間には、人の性は善か惡かなど云つて、古來議論あることであるけれど、日々接近する所の事柄によつて、善にも遷れば、惡にも移ることは、事實上證明されて居るのである。朱に交れば赤くなると、之ればかりは、何とも致し方がないのである。依つて、受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に遇つたからには、此の佛法に接近して、聞法する心がけが第一必要である。其の中ても禪定に關する法門を、一度び耳に觸れて、之れを讚歎隨喜する人は、福を得ること限りなし、實に無限の福德を得ると、聞法に就いて坐禪の功德を述べたのである。

況んや自ら回向して、

直に自性を證すれば、

自性即ち無性にて、

既に戲論を離れたり。

此より已下は、悉く禪定の眞實功德を歎美し、之れを説くのである。即ち他人が摩訶衍の禪定を説くのを聞き、之れを讚歎隨喜して得る功德位のものでない。自ら此の禪定を修し、其の修行に依り、心の中に回轉趣向して、大悟を得れば、自性本來佛なることを覺得することが出来る。既に覺得されたる自性は、之れを覺得すると同時に、絶對的佛陀となつて仕舞ふ。之れを悟らざる間こそ、衆生だの佛だのと云ふけれど、氷の外に水も無く、水を離て氷もない。既に氷と水とは不二、一體なることが分れば、水だ氷だと差別することは要ぬ。絶對的水となつて仕舞ふのと同様である。差別見に住して、平等を見得ざる時は、

佛もあれば、鬼もあるけれど、若し一度び自性を證得すれば、地獄も無く極樂もない、全く絶対平等になつて仕舞ふ。一度び此の絶対平等の地位に住して後は、茲に又山川草木國土人畜の差別を見、而も其の差別を見て、其の差別に拘泥しない、差別のまゝで平等、平等のまゝで差別と云ふ、自由自在の妙智見を得るのである。扱てこの自ら回向してと云ふことに就いては、大覺禪師の垂示を以つて、よく／＼玩味し置くべし。垂示に曰く、「外の諸法を照す自己の光明を回し、向をして内の自己を照すなり。心は明なること日月の光の如く、無量無邊にして、内外一切の國土を照す。光の及ばざる處は闇し、是を黒山の鬼神と名づく。一切の鬼神其の中に住す、鬼神は能く人を害す、心

法も亦復是の如し。心性の智光は無量無邊にして、一切の境界を照す。光の及ばざる處は暗し、是れを無明の陰界と名づく。一切の煩惱其の中に住す、煩惱は能く人を害す。智心は光なり、妄念は影なり、光物を耀すを照すと云ふ。心念諸の境界に遷らずして、本性に向ふを回光返照と云ふ。又遍照とも云ふ。遍照の當體は、迷悟未だ露はれざる處なり。今時の人、妄念をもて本心と思ひ、煩惱をもて樂となす、何の時か生死を離れんやと。然れば回向とは、自己の智光を以つて、自己の心性に向つて回光返照することである。此の回光返照に依つて、其の自性を照見すれば、其處に絶対的自性に逢著し、其の自性は忽ちにして絶対的のものとなるが故に、自性即ち無性である。此の自

性即ち無性の境界は、豁然大悟の境界であるから、無性有性の差別なく、自性他性の議論もないのである。是れは實際門の上で云ふので、論議門の上で云ふのではないから、眞實であつて、戲論を離れて居る。教相學者が、平等だの、差別だの、平等即差別だのと、色々言ひ立て、居るのは、實際門ではなくて、論議門である。實際ではなくて、戲論空論である。所謂机上の空論と云はうか、壘の上の水練と云はうか、戲に齊しい。悟の眼明けざる盲者は、假令多聞なること阿難尊者に勝れ、辯舌は富婁那尊者以上であつても、皆なこれ戲論である。昔し鏡面王と云ふ王様があつて、群盲を召して、一の大象を模索せしめた。王多くの盲人に令して、諸子其の象を見て我れに對へよと言は

れた。乃て群盲は先づ象に就いて之れを見たが、象の足を探ぐつた一盲者は、象は膝桶の如きものであると對へた。次に其の尾を持つる者は、象は掃帚の類であると對へた。次に尾の本の方を取りし者は、象は杖の如きものぞと對へ、腹を持つる者は、象は鼓の如きものと奏上した。又其の脇を探りし者は、象は壁の如きものと言上し、背に觸れた者は高坑と言ひ、耳を取る者は箕の如しと云ひ、牙を持つ者は角の如しと對へたのである。眞に面白いことぢや。而して互に我が言を信じ、他と争ひ、他の言を非として居るのである。大王歎じて譬か譬か、眼目なき者にして、諦觀すと言はれたと云ふことが、「六度經」に出て居る。是れ固より一の譬喩に過ぎないが、自性を證得せざる者は

智光なく、其の眼は盲たる者であるから、やれ西方だの、やれ念佛だの、やれ地獄だの、やれ極樂だの、やれ佛、やれ鬼と、種々勝手な熱を噴いて居るけれど、之れは今の盲者が、一端を保持して全般を推し、戲論をなして居る様なものであるが、若し一度び智光を以つて、其の自性を證得すれば、自性即ち無性に、絶對平等の見地になり、一切の戲論を離れて、眞實即身成佛なることを證悟し得るのである。

因果一如の門開け、

無二無三の道直し。

此の二句は、禪定の功德として、因果一如を證得することを明すのである。過去の因を知らんと欲せば現在の果を觀よ、未來の果を知らんと欲せば、現在の因を觀よとは、佛が説き置かれ

た教誡である。此れは因と果と差別して見る時で、普通因果と云へば、此の差別門より云ふのである。世間で云つても、種子として地下に蒔いた米や麥は因であつて、之れより芽や莖を生じ、實を結んだ處は、即ち果である。然し因に由つて果を得ると云ふことは、一應の理で、因さへあれば、必ず果を得るかと思ふに、然も言はれない。倉庫の中に藏して居る所の米麥よりは、決して芽や莖を出さない。倉庫中の米麥は、必ず土地、溫度、水分等の諸縁を待つて、其の果を生ずるのである。故に佛教では、因縁果の三法として説いてあるので、殊に教相家の方では、六因四縁五果など、事面倒なことを言ひ立てるのであるが、普通では、縁を因に收めて、因果と言ひ習はして居るので

ある。然し何れにしても、因果と分つて居る時は差別門であつて、因と果と差別し、而も之れは時間的のもので、堅に観るのである。然るに禪宗より見る時は、空間的に、寧ろ平面的に、之れを觀ようとするのである。即ち差別門に對する語で表せば、平等門である。吾が宗旨上に於ては、總て心が本であつて、心より一切の萬象萬法を變現して、之れを眺むるもので其の實如幻假有のものである。其の如幻假有の上に因果の文をなして居るので、其の實、因果一如平等のものである。然れば禪定を修行すれば、茲に因果一如の平等門が開けて、平面的に此の因果を觀得る眼が開けるのである。この因果一如は、一の證りであつて、凡眼では、到底見得られぬ。之れ全く禪定を修行した功

徳に外ならぬのである。無二無三の道直しと云ふ語の據を求むれば、『法華經』の、唯一乘法無二亦無三と云ふより出て居るのである。『法華經』では、法華一乘の法門を卓上するため、佛が演べられたので、一乘法を絶對的の教法としたのである。故に一乘と云ふのも、教字的の、二乗三乘に對したのでなくて、絶對的のものとするのである。今も因果一如の法のみあつて、二もなく三もなく、全く因果は不二平等となつたのである。海上風荒くして波を起せど、一度び風收まれば波浪何れにかある。水の其の當體が波となり、波の其の儘が水である。因果は全く隔離して二に分れて居られぬ。因即果、果即因で、因果は全く一如平等になりきつた所は、既に悟に入つて居ることを反證

して居るので、之れも全く禪定修行の功德である。

無相の相を相として、行にも歸るも餘所ならず、

無念の念を念として、諸ふも舞ふも法の聲。

此の四句は、同じく上來所明の禪定功德であつて、其の中前に因果一如の悟を得ることを示したが、この四句では、其の悟の一層奥深く進んで行くのである。即ち前は差別より平等に入るの悟りであつたが、其の平等も悪平等に陥ると、悟は退轉して、迷になつて、仕舞ふ。然し禪定を修行して居れば、かゝる悪平等に陥るの恐れなく、益々進んで、平等より差別を開き出すことが出来るのである。凡そ佛教に於ては、諸相と云ふ時は、如幻假有の相狀を云ふので、之れを生、住、異、滅の四相に就いて

て示すか、生、老、病、死の四相に就いて説くのである。其の他種々の方面より其の相狀を説くのであるけれど、皆な之れ差別門より云ふのである。此の差別見が、禪定の功德に依つて、平等見に進んだ所が、即ち相即無相になつた無相の見である。然し其の無相も無相と執すれば、却つて有相と同じく、迷見たることを免れぬ。故に一步を進めて、無相より復び有相を顯し、相即無相、無相即相と融即せぬば、眞實絶對平等の悟りとは言ひ難いのである。然るに禪定を修行すれば、禪定の功德として、相より無相に入り、無相より相に入る所の、絶對平等の悟りを開くことが出来るのである。無相と云ふ相狀を、又山あり河ありといふ差別の相狀にし、而も其の差別の相狀に迷惑せざる所

が大悟である。「無一物の所無盡藏、花なり月あり、樓臺あり」と云ふ有様が、この無相の相を相とした所である。東波居士の深聲便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身に非ざらんや」と謳つた所も全くこの境界である。若しこの境界に到達すれば、行くも歸るも餘所ならずて、厭ふべき穢土もなく、求むべき淨土もない、この山川草木の國土其の儘が寂光淨土である。笑ふも泣くも、凡て之れ彌陀の説法であると悟つて仕舞ふのであるから、其の心の安きこと言はん方なく、實に樂なものであるから、之れを極樂とも稱し得るのである。古人はこの消息を詠つて、「到得歸來無別事、廬山烟雨、浙江潮」と言つて居る、諷誦すべしぢや。無相の相を相とすることが會得出來れば、無念の念を念とす

ること、同じく會得し得る道理である。念は思念と熟し、吾の妄想分別のこととて之れを邪念と云ふ。邪念を離るれば正念になる、正念は即ち無念であつて、この無念より更に有念に入つて、而も邪ならざる所に進んだのを大悟と云ふのである。然るに世の中には無念と云ふことを、全く念想なきこととて、頑空無記であると思ひ、枯木同然と會する者があるが、誤解も甚だし。一體斯ることは、道理や理窟を以つて言ふべきものでなく、實際の修行をして後に言ふべきものであるけれど、多くの人は修行なくして、自己の臆説を以つて、都合よき解釋をして行かうと思ふより誤が生ずるのである。然し無念と云ふことは、然く石化し去ることとてなくて、正念に住した所である。其の正

念に住した上に、差別の念想を生ずれば、春は百花其の美を競ひ、百鳥和して歌ひ、夏は暑氣激甚、而も晚風堤塘涼味を送るである。或は秋風一夜西より來れば、芭蕉の破れ葉を動かして、パスく響かせ、冬は一望千里銀臺玉堂の美觀を呈し、或は山川國土、飛禽走獸の念を起すも、皆な正念であつて、邪念なく、念々一切を想念して、現出する所に惑はない。故に謠ふも舞ふも法の聲で、やはり溪聲是れ廣長舌である。所謂遊戯三昧ぢや。『法華經』の從地涌出品の道具立ての莊嚴も驚くに足らず、維摩の方丈は千の高座を構へ、万の大衆を容れると云ふ、神變不思議の活劇を演出したるも、奇蹟とするに足らぬ。或は金牛和尚の飯桶の舞、普化和尙の掣願の働き、脱洒自在なものとし

六

て表れるのである。然るに世の中には、一種の飛び上り者があつて、心に何の得たる所もなく、濫に奇を好み、異を衒ひ、放逸を以つて眞率の振舞となし、戲論を以つて活達と思ひ、頓智を以つて頓悟と錯り、輕薄を以つて無頓着と認めて居る輩がある。然し無念の念を念とする者と、之れ等の禪病患者とは、日を同じうして語ることは出來ない。臨濟禪師は、夫れ六通とは、色界に入つて色惑を被らず、聲界に入つて聲惑を被らず、香界に入つて香惑を被らず、味界に入つて味惑を被らず、觸界に入つて觸惑を被らず、法界に入つて法惑を被らず、故に六種の色の道人を繫縛すること能はずと垂示されて居る。或は又道流唯

六

目前、現今聽法底の人のみあつて、火に入つても焼けず、水に入つても溺れず、三塗地獄に入つても園觀に遊ぶが如く、餓鬼畜生に入つても報を受けず、何に縁て此の如くなる、嫌底の法無ければなりと。此の臨濟禪師の垂示が徹底すれば、謠ふも舞ふも法の聲で、立つも坐るも、皆な軌矩に順ふ。是れも亦禪定の修行より得たる功德で、是れを大悟徹底と云ふ。此處まで進めば、再び退轉することなく、一時に東天の白け渡るを認め、金光遍く四方を照して、日輪は登り來るのである。

三昧無礙の空ひろく、

四智圓明の月さえん

此の二句は、禪定の功德に依つて、四智を成得することを明すのである。三昧は梵語で、具には三摩地と云ひ、譯して、正受、

正思惟、又は等持等と云ふ。譯名に種々あるけれど、要するに、禪定の正しきものを三昧と云ふのである。即ち前に得た所の、無相の相、無念の念と云ふ如き證りの相續した所が、三昧無礙の有様である。無礙は自由自在、七縦八横の意で、一物の障礙するものなく、眞實意の如くに働き、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現すと云ふやうな、融通の利かない悟りてはなくて、漢來れば漢も現じ胡も現ずる、胡來れば胡を現ずると共に、漢をも現ずると云ふ所が、無礙自在である。一切の善惡是非は申すに及ばず、好醜順逆等、所有境界を、一面の寶鏡の上に、平等に見ることが出来る。是に於てか、諸法は我に映じ、我亦諸法に映じ、兩鏡照見して、中心影像なしとは、茲を云ふのぢや。か

く三昧無礙自在の太空があると、其處に四智圓明の月がさえ渡つて輝くのである。四智とは有漏煩惱の八識を轉捨して、無漏清淨の智慧を得ることを云ふので、所謂四智とは、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、及び成所作智である。第一の大圓鏡智とは、即ち有漏煩惱の第八識を轉捨して得る所の智慧であつて、佛果に至つて初めて得る所の智慧を云ふ。三世の諸法は常に此の智慧の上に現はるゝに、大圓鏡に映ずるが如く、明瞭にして錯ることなく、萬徳圓滿して缺くる所なき智慧であるから、大圓鏡智と云ひ、鏡の明瞭に映寫して欺かざるに譬へたのである。佛の大悲に依るが故に、一切の衆生を縁し、大智に依るが故に萬法を照見すること法性の如く、些の誤もないのである。故に

これ佛智の一にして、佛果に至つて得る所のものである。第二に平等性智とは第七識を轉じて得る所の智慧であつて、眞理を見出せし見道より起る智慧であるけれど佛果に至つて成就する所の智慧であるから、大圓鏡智と同じく、佛智である。これは我他彼此の差別見を離れて、平等見に至るの智慧で、一切の諸法及び、自他の有情を縁するも、其の間に些の差別を認めず、平等一如の理性を觀じ、全く差別の想を離捨して、大慈悲心を起し、菩薩のために化益を施す所の智慧を云ふのである。第三に妙觀察智とは、有漏の第六識を轉捨して得る所の智慧であつて、眞如眞實の道理を照見する時に、初めて起り、この智慧を成得するのである。即ち此の智慧は諸法の自相及び共相を觀じ、

一切の功徳を藏め、諸の衆生に對して大法輪を轉じ、説法教化して諸の疑惑疑念を斷ぜしむる智慧である。然れば前二智の如く、佛果に至つて成就するものでなく、既に眞理を正觀する所の、所謂見道に於て、初めて得る所のものである。最後に第四の成所作智とは有漏の前五識を轉捨して得る所の智慧であつて、一切衆生を化益するために、三業に於て、種々の變化をなし、化身を現じて諸の衆生をして善業を成熟せしめようとする所の智慧のことである。然れば四智其の起り初める時に、多少の相違はあるけれど、何れも佛果に於て、著しく顯れ來り、而もよく自在に應用される所の智慧であれば、之れを亦佛果の功徳として、佛の四智と云ふのである。

扱て茲に入識と云ふことが出て來たから、序てながら、佛敎心理學の一端たる、八識の事を略辯して置くのも、徒事ではなからうと思ふ。先づ八識の名目を列すれば左の通りである。

- ◎八識
- 一、眼識
 - 二、耳識
 - 三、鼻識
 - 四、舌識
 - 五、身識
 - 六、意識(分別識)……………第六識
 - 七、末那識(我見識)……………第七識
 - 八、阿賴耶識(異熟識)……………第八識
- 前五識

凡そ心の起る時には、必ず其の能縁の心と、所縁の境とが要る。依つて第一の眼識は眼根に依つて起り、色境なる物質界の、形状等に對する認識作用を云ふ。耳識は耳根に依り、聲境に對して起す認識作用である。鼻識は鼻根に依り、香境に對して起す認識作用、舌識は舌根に依り、味境に對し、身識は身根に依り、觸境に對して起す所の、認識作用を云ふので、此の前五識の作用は、全く認識作用と言ひ得るのである。第六識より後の心理は、やや複雑になつて行くのである。即ち意識は意根に依りて、法境を緣じて起り、前五識の認識作用の上に、更に分別して、善惡邪正の判断を下す所の心理的作用を云ふのである。故にこの意識のことを、別して分別識とも稱するのである。第七識は、

末那識と云ひ、第六識の分別した所へ、更に我見を以つて執し、自己に向つて有利なるものを取つて、有害なるものを捨つるのである、而して其有利有害とするのも全く自己煩惱の我見を以つて判断識別するのであるから、公平なる判断でなく、全く誤つて居る判断を下すのである、故に之れを我見識とも云ふのである。第八阿頼耶識とは、譯して藏識と云ふが、此の識は其の心理的作用としては、極めて微細なもので、第七識の起す心理作用を、其のまま薰習し保管して置いて、自己の諸縁にあふ時其の會て薰習せしものを變化して、再び第七識に我見を起さしむるもので、吾々の迷は、全く此の第八識に薰習された種子に因るのである。己上の説は、教相家の方でも、法相哲學に於て

言ふ所であるけれど、大乘の教理に於ては、一般に承認して居る心理作用である。

然れば衆生の活りを開かざる間は、所謂八識の心理作用に依るのであるけれど、禪定を修行して、益々進む時は、其の禪定も無礙自在になつて、遂に煩惱有漏の八識作用を、轉捨して、無漏情淨なる八識作用を呈するに至つた所は、即ち悟りの境界であつて、其の所謂無漏の八識作用を起すを、四智としたのである、吾が宗旨では、かゝる教相的解釋を用ひないのであるけれど、四智を辯ずるに就いては、一應之れを解釋する必要もあるのである、而してこの四智を應用すれば、茲に佛の三身を現することが出来るのである、法身は理に當り、報身は智に當り、

應身は用に配すべきである、曹洞の五位も、臨済の四料簡も、共にこの四智の活用である。さてこの三身とか四智と云へば、最初より佛に預けたものゝやうに思ふかもしれぬが、決して然うてない。臨済禪師が既に言つて居られる。「爾祖佛と別ならざらんことを要せば、但々外に求むること莫れ、爾が一念心上の情淨光、是れ汝か屋裡の法身佛なり、爾が一念心上の無分別光、是れ汝が屋裡の報身佛なり、爾が一念心上の無差別光、是れ汝が屋裡の化身佛なり。此の三種の身は、是れ爾が即今目前聽法底の人なり」と。眞に剴切痛快なる垂示と云ふべしぢや。然れば禪定の功德に依つて、三昧無礙の力を得て、其の上に佛の四智をも得れば、三身をも現することが出来るので、之れを空と云

ひ、または月と稱して、風流の間に宗旨を顯したのである。

此の時何をか求むべき、寂滅現前する故に、

當所即ち蓮華國、此の身即ち佛なり。

此の四句は證悟の極點を示して、この和讃を結ぶのである。既に三昧無礙の功德を得て、佛果の四智を具足するから、此の上早や求むる所のものはない。全く寂滅現前して、迷界差別の見を離れざる間は、求むべき佛もあり、斷すべき煩惱もあつたけれど、寂滅現前した後は、實に三千世界は我が有になつて仕舞ふから、更に生死を離るゝことも要らぬ、菩提を求むるにも及ばぬ。今また臨濟禪師の法語を以つてすれば、修行しようと思ふ者が、一切馳求する心が歇まぬから、一切がまた繫縛になつ

て、却々容易に求むるものまで、求められなくなつて仕舞ふ。我が見處を以てすれば、求むべき一切が無い、報身化身の佛頭をも坐斷して仕舞へば、十地の滿心は猶客作兒の如きもの、等覺妙覺の階位は擔枷鎖の漢で、其んな處を望む者は佛果には上られぬ。羅漢辟支は廁穢の如しと極端にも言れたものであるが、之れが狂人や白痴の言つて居る言葉なら價もないが、臨濟禪師の、眞實見性の上より仰つしやるのであるから、之れが又大に難有いのである。菩提涅槃は繫驢橛の如く、糞拂き橛であるといはれる。何うして斯うなるかと云ふに、寂滅現前しないから、色々の障礙となつて來る。佛を求むるものは、佛に縛せられて悟を取らず、悟を求むる者は、悟に縛せられて、佛果は得られ

ぬ。若し真正の道人ならば、禪定の功德として、其處に寂滅現前する故に、縁に随つて舊業を消し、任運に衣裳を着け、行かうとすれば則ち行き、坐らうとすれば、則ち坐り、一念も心頭に佛果を希求することなくして、自然に佛果の中に在りといふ有様である。故に古人は作業して佛を求めんとすれば、佛は是れ生死の大兆なりと言つて居られる。佛は生死の大兆なら、煩惱業と同様である。古人又曰く、「演若達多頭を失却す、求心歇む所即ち無事」と。之れ全く寂滅現前の當體より説き出したものであつて、大獅子の吼ゆるに似て居る。故に之れを聞いた野干の輩は、腦天が破裂するであらう。其の聲は尋常なる聲ではないから。

寂滅現前すれば、當所即ち蓮華國、此の身即ち佛なりて、別に西方十萬億の遠方まで行くには及ばぬ、其の場が其の儘蓮華國である。極樂淨土である。光明世界である。或は蓮華藏世界と謂つてもよろしい。此の世界が極樂になつて仕舞ふのみか、此の身も其の儘佛である。佛は我が心の外にはない。所謂唯心の彌陀、己心の淨土で、此の境界になつた所が、見性成佛である。即身即佛である。無難禪師の法語に曰く、「大さに發心して山に入らんと思へる人に、難有き御志なり、怠り玉ふな。假令山の奥なればとて、浮世の外ならず、元の心を離れずば、住處かへたるばかりにて侍らんと云ひて詠める、

心より外に入るべき山もなし、しらぬ處を隠れ家にして

と。實に心より外に入るべき所はない。心こそ第一に求むべきものであつて、また最後の歸着點である。吾が宗はこの心を實究するを以つて要とし、其の心の上に安住するを宗とするのである。上來白隠和尚の和讚について、衆生本來佛なることを説き、見性成佛の旨を述べて來ましたが、また最後に於て、この吾が身が即ち佛であることを悟り終つたのである。されば此の時何をか求むべき、寂滅現前する故に、當所即ち蓮華國、此の身即ち佛なり。まづ『坐禪和讚』の講話も、之れて畢りました。

坐禪和讚講話終

明治四十五年七月廿八日印刷

明治四十五年七月廿八日發行

(坐禪和讚講話奥付)

定價貳拾五錢

著 作者

釋

宗

演

發 行者

今

立

裕

印 刷 者

藤

本

兼

吉

不許複製

發行所

東京市神田區駿河臺袋町
振替口座東京二二二二三番
電話本局二九九九番

光融館

東京市神田區駿河臺袋町一丁目十二番地
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

師著 吉谷覺齋	阿彌陀經講義	一 郵 三〇〇 四〇	淨土門の三經各其宣顯する所あり、雖も又自ら一 致する所あり、吉谷講師此邊の義を闡明すること 頗る深遠、本書の價値ある所以なり
師著 南條文雄	梵文阿彌陀經講義	一 郵 四八〇 六〇	梵文の阿彌陀經を取り來つて丁寧に講解し本經の 眞實を發揮せられたるもの、漢譯と比較研究せば 少からざる興味を發見するを疑はず
師著 大道長安	觀音經講義	一 郵 七五〇 八〇	法華普門品の一卷を所依經として妙力門救世教の 一宗を建立せる著者が蘊蓄を傾けて講ぜられたる ものにして亦實に師が最後の說法也
居士著 大内青嶽	般若心經講義 佛說法滅盡經講義	合本 一 郵 二〇〇 四〇	心經の大般若經六百卷の精髄なるは言ふまでもな し、法滅盡經は佛教が末世に至り滅盡せんとする 様を世尊自ら豫言し給へる寶典なり
師遺著 原坦山	首楞嚴經講義	二 郵 七〇〇 八〇	學者として又畸人として明治佛教界に著名なる坦 山師が最も得意とせる本經の講話を青嶽居士の校 訂せるものにして第二卷迄既刊せり
師著 前田慧雲	那先比丘經講義	一 郵 四五〇 六〇	バクトリヤの領主メナンデル大王が北方印度佛教 の後才那先比丘を宮中に請し佛教の要義を問答せ る者本書英漢兩譯を對照講説せり

師著 島地默雷	維摩經講義	一 郵 五〇〇 六〇	本書は維什道生鑿法師及び吾聖德太子の註疏等を 參酌して講解せられしもの、維摩入不二の法門は 本書を透して諸君面前に打開せらる
居士著 大内青嶽	四十二章經講義	一 郵 二五〇 四〇	本經は印度より支那に傳來せし最初の經典にして 又最初の翻譯なり、佛教の如何なる宗教なるやを 知らんとするものは先づ本書を讀め
師著 山田孝道	佛遺教經講義	一 郵 三〇〇 四〇	釋尊一代の教化を終へ將に入滅に臨みて説きたる もの此經にして、人天衆の心得より大乘至極涅槃 常住の旨に及ぶ、佛教徒必讀の書也
釋雲照 律師著	十善業道經講義	一 郵 七五〇 八〇	此經は釋尊娑竭羅龍宮に於て龍王の爲めに佛教の 因果律を立脚地として説けるもの、一讀故雲照大 阿闍黎の德音に接するの感あるなり
師著 齋藤唯信	無量壽經講義	一 郵 七五〇 八〇	本經は阿彌陀如來成佛の因果と衆生往生の因果を 説けるもの、本講義はその形式に新生面を開きた れば現代的頭腦の人には最も適當也
師著 島地默雷	觀無量壽經講義	一 郵 六〇〇 六〇	古來淨土門の信仰を説くもの競ふて此經を講じた るもその眞實を發揮せるは善導大師也、本書は著 者が善導の流に依て懇切に講解せり

天桂傳尊 禪師提唱	勝峰大徹 師著	釋宗演 師著	山田孝道 師著	若生形山 師著	若生形山 師著
碧巖錄講義	臨濟錄講義	無門關講義	菜根譚講義	寒山詩講義	禪關策進講義
一 三〇〇	一 八〇〇	一 七五〇	二 一〇〇〇	一 五〇〇	一 五〇〇
郵 一六〇	郵 八〇	郵 八〇	郵 一三〇	郵 八〇	郵 八〇
碧巖集は禪門第一の書、天桂和尚は洞上五百年間 山の善智識、見よ一頁則中の諸祖師及事實圖悟が 師の舌頭に如何に活躍し來れるかを	故大徹老師が高座上に柱杖を擡て大音獅子吼せら れしは禪界の一條觀なりき、臨濟宗意を知らんと せば先づ師の痛快なる提唱に接せよ	徳富蘇峰居士本書を評して曰く、宗演師の講義は 講義と云はんよりも寧ろ其題目を藉りて胸中の蘊 蓄を吐きたる者と、本書の價値可知	明代の高士洪自誠が佛道釋三教の粹を陶冶して 處世の訣と悟道の要を示したるもの、著者が通俗 平易の講説は容易に之を了解せしむ	寒山詩三百十二首玄之又玄古來難解と稱す、本書 は白隱禪師の閑提記聞に據りて丁寧に之れを講解 し故事典故等一日瞭然たらしめたり	臨濟宗中興の祖白隱禪師も其雲水終養時代に本書 を愛讀して一生の指針とせるは人の能く知る所、 參禪者は必ず一本を座右にすべき也

山田孝道 師著	山田孝道 師著	大内香籍 釋宗演	山田孝道 師著	山田孝道 師著	高田道見 師著
瀧山警策講義	學道用心集講義	碧巖錄十則講義 寶鏡三昧講義	普勸坐禪儀講義 坐禪用心記講義	證道歌講義	正法辨道話講義
一 三〇〇	一 三三〇	合本 一 五〇〇	合本 一 二〇〇	一 一六〇	一 五〇〇
郵 四〇	郵 四〇	郵 八〇	郵 四〇	郵 四〇	郵 八〇
本書は大瀧山禪師の著書夜十二時養器を抱へ本來 具有の面目を知らず俗界利名の巷に走る似而非道 者の尻べたを管打たれる警策の鞭也	道元禪師遺文中の粹にして學佛道者の爲めに用 心を示されたるもの、斯道に志すの士は本講義に 依り師が老婆鐵棍の慈悲を信受せよ	碧巖錄に古徳尊宿の活作略を窺ふべく、寶鏡三昧 に禪法深遠の哲理を見るべし、其他十玄談湯仰要 路等有益なる禪書の講義を附載せり	坐禪儀は道元禪師の著、用心記は瑩山禪師の著、 共に坐禪の儀式作法心得等を説けるもの、初學者 は先づ兩書に依て其要旨を究究せよ	證道歌は唐の永嘉大師が悟道の長詩にして語簡に 意深く押韻自在聲調流暢禪門千古の絶唱也、參禪 の暇試に之を賦誦すれば悠然神遠矣	道元禪師の正法眼藏中より辨道話一篇を抽出して 之を講解せるもの、題目に依らず念佛に依らず坐 禪を以て一方究盡を志すものは誤め

若生國榮 師 著	織田得能 師 著	島地大等 師 著	前田慧雲 博士 著	姫路大圓 釋清潭	大内青巒 居士 著
父母恩重經講義	天台四教儀講義	十不二門論講義	天台西谷名目講義	菩提心論講義 大乘止觀頌講義	原人論講義
一	一	一	一	合本 一	一
郵 二〇〇	郵 五〇〇	郵 六〇〇	郵 四〇〇	郵 一六〇	郵 三六〇
泰西物質主義の影響を受け吾邦固有の道德たる忠孝の美風が日に廢頹しつゝあるに際し本經を流布するは時弊を濟ふに大功あるべき也	高麗の沙門諦觀師四教の要義を簡約して本書を著す、天台の學者古來以て津梁とせり荆溪の流を汲まんとする者は先づ本講義より入れ	本書は第一編支那本朝の天台教史及本論研究の歴史を述べ第二編天台教義の要領を説き第三編に於て各章本文分科解釋の三段に分てり	本書は天台宗圓教に用ふる所の術語を解釋せるものにして之を繙かば同時に天台圓教の教理にも通曉するを得べし、講説亦親切を極む	菩提心論は八宗の祖師龍樹菩薩の著、眞言密教の菩提心を論じたるもの、大乘止觀頌は南岳慧思大師の著、觀心止觀の要義を述べたり	唐の宗密禪師破邪顯正の論法を以て先づ儒道二教を破し小乗教と權大乘を斥け實大乘華嚴の宗義を顯はしたるもの一部の佛教哲學書也

織田得能 師 著	藤谷還由 師 著	齋藤唯信 師 著	織田得能 師 著	龜谷天尊 先生 著	織田得能 師 著
因明學大意	俱舍宗大意	三十唯識論講義	華嚴學講義	金獅子章講義	大乘起信論義記講義
合本 一	合本 一	一	一	一	一
郵 二六〇	郵 六〇〇	郵 六〇〇	郵 二五〇	郵 二五〇	郵 一、三〇〇
因明學は佛教哲學中の論理學にして此因明の論理學上立量に就て不正なるもの三十三過あり、斯學に精通せる博士が講説せる者本書即是	俱舍哲學の組織内容に通曉せんと欲せば先づ其名目術語に熟するを捷徑となす、本書は即ち其主な名目七十五語を取り詳解を下せり	俱舍唯識は佛教の基礎にして又印度哲學の重要なもの也、學者先づ本書に依りて其大意を了得し然る後その蘊奥を極むべし	本書は華嚴經の要義を探り華嚴一宗の宗意を闡顯し事々無礙法界の支理を説きたるもの、著者多年華嚴學專攻の餘に成りたる快著なり	賢首大師則天武后の召に應じ長生殿に於て華嚴宗意を講説し而前の金獅子を提へて喻とし法界緣起の妙理を發揮せる甚深微妙の大文字	大乘起信論は馬鳴論士の著、義記は唐の賢首大師の註釋せるもの、本書古來末疏等頗る多し、著者其要を平易に講解し、六百頁中に收む

道重信教 師著	淨土往生論講義	一冊	郵 六〇	700	西方淨土の思想は馬鳴龍樹等の論師に依り唱出されたり。其天親菩薩の本論の如く組織的に説かれたるはなし。本書能く其旨を發揮せり。
香月院 深勸講著	教行信證講義	一冊 帙入	郵 三〇〇	1000	香月院上人曾て教行信證を講ず。本書是なり。唯證の一卷を缺けるを以て。今皆往院頓慧師の講義を以て之を補ふ。眞宗學者必須の寶典なり。
皆往院 頓慧師著	教行信證講義 信證眞佛土化身講義	一冊	郵 二〇〇	650	本書は前の教行信證講義と合せ眞宗御本書の講義全く茲に完結す。眞に希有の珍籍也。眞宗俗此に依り開祖聖人微妙の法義を頂戴せよ。
前田慧雲 博士著	正信偈講義	一冊	郵 四〇	170	淨土眞宗の開祖親鸞聖人が正しき信仰を勤めむが爲めに述べ玉へる偈頌にして、博士の講義は繁簡其中を得能く開祖の眞意を發揮せり。
近角常親 師著	歎異鈔講義	一冊	郵 六〇	650	此書は親鸞上人が熱烈なる信仰を告白せるものにして、近角學士は又當代に於て熱烈なる信仰者として知らる。本書内容の充實可知矣。
伊藤哲英 師著	改悔文講話	一冊	郵 二〇	160	本書は淨土眞宗の中興蓮如上人の撰述にして文字僅に二百字内外に過ぎず。而も眞宗の安心法門は悉く此中に攝め盡して漏すまゝなるなし。

道重信教 師著	淨土往生論講義	一冊	郵 六〇	700	西方淨土の思想は馬鳴龍樹等の論師に依り唱出されたり。其天親菩薩の本論の如く組織的に説かれたるはなし。本書能く其旨を發揮せり。
香月院 深勸講著	教行信證講義	一冊 帙入	郵 三〇〇	1000	香月院上人曾て教行信證を講ず。本書是なり。唯證の一卷を缺けるを以て。今皆往院頓慧師の講義を以て之を補ふ。眞宗學者必須の寶典なり。
皆往院 頓慧師著	教行信證講義 信證眞佛土化身講義	一冊	郵 二〇〇	650	本書は前の教行信證講義と合せ眞宗御本書の講義全く茲に完結す。眞に希有の珍籍也。眞宗俗此に依り開祖聖人微妙の法義を頂戴せよ。
前田慧雲 博士著	正信偈講義	一冊	郵 四〇	170	淨土眞宗の開祖親鸞聖人が正しき信仰を勤めむが爲めに述べ玉へる偈頌にして、博士の講義は繁簡其中を得能く開祖の眞意を發揮せり。
近角常親 師著	歎異鈔講義	一冊	郵 六〇	650	此書は親鸞上人が熱烈なる信仰を告白せるものにして、近角學士は又當代に於て熱烈なる信仰者として知らる。本書内容の充實可知矣。
伊藤哲英 師著	改悔文講話	一冊	郵 二〇	160	本書は淨土眞宗の中興蓮如上人の撰述にして文字僅に二百字内外に過ぎず。而も眞宗の安心法門は悉く此中に攝め盡して漏すまゝなるなし。
釋慶淳 師著	即身成佛講義	一冊	郵 六	550	眞言秘密の深旨を究めんと欲せば先づ即身成佛の義に通せん事を要す。一切差別の迷見は之に依り破却するを得べし。本書之を詳述す。
織田得能 師著	八宗綱要講義	一冊	郵 三	130	南都東大寺凝然大徳の著。俱舍、戒實、律、法相、三論、天台、華嚴、眞言八宗教義の綱要を説けり。織田師の講義又頗る明晰を極む。
齋藤唯信 師著	三經の大綱	一冊	郵 四	250	淨土教の三部經即ち無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の大綱要領を達意的に叙せるものにして其脉絡系統關係を説示し其の遺憾なき也。
齋藤唯信 師著	七祖の大綱	二冊	郵 六	45	淨土教の七祖即ち印度の龍樹、天親、支那の曇鸞、道綽、善導、日本の源信、法然が法説を對照比較して、教理發達の跡を明かにせり。
東嶺禪師 撰著	達磨經說通考疏	和六本	郵 一六	500	學徳雙絶を以て白隱會下に鳴れる東嶺和尚が異説多き本經を註釋せるもの考經頗る該博經義を剖折して餘蘊なし。美濃列五百枚の大著。

禪書の部

著者	書名	冊数	郵定税價	内容
山田孝道 師編	校註禪門法語集	一	郵 一七〇〇 郵 二〇〇	本書は古來吾邦禪門の宗匠碩徳が假名書の法語道話類合計三十部三十三冊を蒐録せり、禪學に志すものは先づ之に依て入るを捷徑とす
森大狂 居士編	校註續禪門法語集	一	郵 二五〇〇 郵 二二〇	本書輯むる所合計三〇〇部四十一冊前編と合せて假名法語類の精神を網羅せり、平易通俗の文字禪宗の妙理を發揮す學者必須の寶典也
森大狂 居士編	禪林叢書	三	郵 各三五〇 郵 六〇	本叢書第一編は東坡禪集及び澤庵和尚垂示正眼國師眼目の三種、第二編は居士分燈錄及び道元禪師和歌集法燈國師法語の三種を收む

著者	書名	冊数	郵定税價	内容
森大狂 居士編	一休和尚全集	一	郵 五〇〇 郵 八〇	五山傑出の高僧一代の風流洒落兒たる狂雲子一休が遊戯七十餘年間に著作せる隨筆、小説、物語、話曲、偈頌和歌等は收めて本書に在り
釋悟庵 師編	坦山和尚全集	一	郵 一三〇〇 郵 二二〇	吾國に過きたるものが二つあり駿河の不二に原の白隠と稱はれたる臨濟中興の名匠正宗國師一代の假名法語を收む、參禪者必讀の寶典
原僧運 郡若	禪學早わかり	一	郵 四五〇 郵 六〇	一代の偉僧として又時人として明治佛教界に傑出せる坦山和尚の全集也、收むる所悉く同源論開弁異體論心性實驗錄演說詩文逸話
釋宗演 師著	一字不説	一	郵 五〇〇 郵 六〇	本書は著者が酒々落々風流三昧に遊戯せらるる手すきびに高僧阿玄なる禪理を爐邊の茶話に寓して通俗平易に述べられたる面白き書也
勝峰大徹 師述	禪と長壽法	一	郵 五〇〇 郵 六〇	禪界の泰斗釋宗演老師が辯才に秀でたるは世の能く知る所、本書は師が諸處の請に應じ廣長舌を揮て講演せられたる者十四篇を録せり

師 釋悟庵 著	足立栗園 先生 著	接梧寶嶽 師 著	若生國茶 師 著	山田孝道 師 著	後藤北漢 師 著
禪と武士道	偉人參禪錄	評釋 靜坐のすゝめ	活禪談	殺活自在	修養禪話
一	一	一	寸二珍	寸一珍	寸一珍
郵 六〇	郵 六〇〇	郵 二〇〇	郵 各二五〇	郵 一五〇	郵 二五〇
<p>禪と武士道の大意、禪と武士道の處世觀、歴史上の禪と武士道、禪宗教理と武士道、禪僧と古英雄偉人の臨終等を説く、一讀趣味津々</p>	<p>全編を上流悟道錄、武士參禪錄、三教一致錄の三に分つ、古來歴史上の偉人傑士が如何に其平生を修養せしか、是本書の詳に説く所也</p>	<p>宗演光師が現代的の頭腦を以て禪の妙理を發揮し靜修修養の効を説かれたる「靜坐のすゝめ」の一篇を師が丁寧に評釋布演したる快著也</p>	<p>本書は師一流の廣長舌を以て修禪の方法を面白く説き、古徳名匠の參禪敲唱せる事蹟を示し、縱横無礙に禪の妙用を説破したるもの也</p>	<p>本書説く所、禪、儒、道東西の文學技藝に涉り、近代の高僧偉人烈婦劍客俳優の事蹟等を採り來つて參禪學道の要訣を示したるもの也</p>	<p>本書は古今の禪者か説きたる參禪の要訣、及び古人の言行逸話等を輯録して修養の方法を説明せり文辭平易にして流暢學禪の好伴侶也</p>

師 山田孝道 編	師 鈴木子順 編	忽滑谷快 天師 著	禪道會 編 纂	青龍道人 著 作	白隱和尚 戲 著
禪曹洞聖典	禪臨濟聖典	禪家龜鑑講話	禪林文庫	雲水物語	寐惚の眼覺
寸一珍	寸一珍	一	寸珍	一	一
上 一、〇〇〇 並 七五〇 郵 各八〇	一	郵 七〇〇	各三五〇 郵 四〇〇	郵 八〇〇	郵 二〇〇
<p>曹洞宗に於て日常看讀念誦する經咒偈文三十二種列祖の訓戒十五種回向宣疏葬法念誦等凡そ本宗必須の寶典は悉く網羅せり製本頗る美</p>	<p>本書は曹洞聖典と同型にして臨濟一宗の聖典を悉く収録せり教誨師布教師は勿論本宗一般僧侶檀信徒は必ず一本を座右にせざる可らず</p>	<p>朝鮮國一代の禪匠葆真大師の撰、經典祖錄五十餘種中より學者の指針とすべき語句を輯録附註せる者、著者獨特の講話は趣味津々たり</p>	<p>第一編は白隱禪師著夜船閑話さしも仰白隱法語及正宗國師年譜の四本第二編は澤庵禪師の東海夜話を收む、寸珍美本奇書珍緝々刊行</p>	<p>著者は天龍菟山下の逸足、本書は著者が平生雲水行脚時代の夢の跡を面白くお可笑く綴りたる書、挿圖亦頗る輕妙、天下一品の快書也</p>	<p>正宗國師の白隱が天下の衆生のいつも寐惚け顔せるを憐れむの餘書を綴りたる眼さまし草滑稽洒落の筆致能く達磨宗の的意を發揮せり</p>

各宗用書の部

著者	書名	冊数	定税	内容
鷲尾順敬 先生著	日本佛家人名辭書	一	郵九〇〇 二八〇	吾邦佛教渡來後各宗の高僧碩徳は勿論荷くも一能一藝を以て知られたる佛教六千餘人の傳記を網羅せる明治佛教界不朽の大著は本書是
松尾茂 先生編	道歌大觀	一	郵二〇〇〇 一六〇	本書輯むる所の道歌無慮萬數千首例題に依て分類し二句索引を附し簡易に巻中を索るに便せり國學者宗教教育家座右不可缺の寶典
織田得能 師著	佛語解釋	一	郵一五〇〇 二〇〇	竹取物語枕詞紙花物語大鏡水鏡繪方丈記十訓抄徒然神皇正統記古今集拾遺集の國文十二種中の佛語を解釋し其出典を詳かにせり
織田得能 師著	佛教金言集	一	郵三〇〇 五〇〇	佛典諸經論中より倫理、信仰及び哲學に關する聖語を蒐集して一語毎に通解を施し總振假名を附したれば好箇の修養資料たるや疑なし

目次
日本佛教沿革略 歴代天皇皇后皇子授戒表
門跡歴代 奈良平安朝時代佛家位階官職表
異名異稱索引 諸大寺歴代並諸職次第 日本佛教各宗系統圖
人名首字字彙索引 人名首字字彙索引 名數索引 宗派分類索引
本文(六千餘人傳記) 竹像木版寫眞版數百葉

著者	書名	冊数	定税	内容
釋雲照 律師著	佛教通論	一	郵一〇〇〇 三〇〇	本書は現代の思潮に鑑み、高尚幽玄なる佛教の原理を簡明平易に通論せるもの、律師一代の蘊蓄は箇中に傾注せられたりと云ふも可也
村上嘉精 師著	佛教概論	一	郵八〇〇 六〇〇	吾が佛教々理は之を歴史的に據に研究を要すると同時に又各宗教理其ものに就て研究するの必要あり學者須く本論に就て其大綱を知れ
織田得能 師著	佛教大意	一	郵一〇〇 三〇〇	十三宗二十六派顯あり密あり自力あり他力あり其歸着點を窮め難きは吾佛教也、本書は此要求に應じて平易なる問答體を以て詳説せり
高田道見 師著	佛教人生論	一	郵一三〇〇 二〇〇	生と死、是れ實に人生の大問題也、本書は佛教の原理を基礎として之れが説明を試みたる希世の快文字、意蘊ある生活を窺む者は來れ
齋藤唯信 師著	佛教倫理大觀	一	郵一三〇〇 二〇〇	浩瀚なる一切經中に散在せる倫理説を涉獵し之を系統的組織的に批判詳説せられたるもの本書にして、東洋倫理研究者必讀の名著なり
村上嘉精 師著	大乘佛說論批判	一	郵五〇〇 八〇〇	大乘佛說非佛說の論評は佛教學界に活波瀾を涌起せり本書印度支那及日本諸家の之に關する見解を叙し一々批判を加へ痛快に論斷せり

紹慶密應 師著	佛教哲學新論	一冊	二〇〇〇	郵 二〇〇	吾佛教の東洋哲學の粹粋たるは云ふ迄もなし本書は第一篇に佛教認識論を述べ第二編に形而上學論を述べ佛教哲學研究者必讀の良書也
有馬祐政 先生著	日本哲學要論	一冊	七〇〇	郵 八〇	本書は古來日本に現出せる一切の思想を哲學的に研究し泰西諸哲學と比較討論せる者吾邦思想界の將來を知らんとする者は一讀を要す
岩上行坡 師著	眞宗綱要	一冊	四〇〇	郵 六〇	本書は淨土眞宗の教史より教理に亙り凡そ一宗の要義大綱は細大漏さず悉く之を網羅して通俗平易の說何人にも容易に安心を得せしむ
山田幸道 師著	佛教のすゝめ	一冊	五〇〇	郵 六〇	本書は著者が東西古今の教理學說事實を引き來り懇切平易に佛教を説きすゝめられたるもの新式の說教演説を試むる人にも好參考書也
織田得能 師著	和漢高僧傳	和本 三冊	六〇〇	郵 六〇	本書は日本支那の各宗高僧の傳記を漢文にて綴りたるものにして一部の列傳體傳傳教史と云ふべく各宗中學林の教科書として最も適當也
賢首大師 撰述	大乘起信論義記	一冊	三〇〇	郵 六〇	佛教學者必須の寶典たる本書に嚴に校訂を施し縮刷したるもの、印刷鮮明價亦た甚だ廉各宗學校等の教科用として最も適當なるを信す

白隱禪 師著	延命觀音經靈驗記	和本 二冊	五〇〇	郵 六〇	正宗國師常に其徒をして此經を念誦信受せしめ自ら漢土及本朝に於て此經の靈驗ありし事蹟を蒐録せられし者學者輕易の觀を爲す勿れ
澤柳政大 郎先生譯	佛遺教經	一冊	二〇〇	郵 五〇	文部の重鎮として又佛教篤信家として世に知られたる先生が世尊最終の說法たる本經を翻譯して看讀の便に供せられたるもの本書なり
釋雲照 律師譯	十善業道經	一冊	二〇〇	郵 五〇	本書は十善業道經を翻譯して何人にも讀易からしめたるものなり、卷頭に釋尊の密語を挿入し且つ讀經に就ての作法を暗示せられたり
釋雲照 律師譯	原人論	一冊	二〇〇	郵 五〇	紙數僅少にして而かも佛教哲理を概括せる本書が各地講習會等の講本として需要日に盛なるを以て一般人士の便を圖り翻譯せし者なり
雜書の部					
著者	書名	冊數	定價	郵稅價	內容
釋雲照 律師著	國民教育の本義	一冊	三〇〇	郵 四〇	本書は著者が宗教家としての立場より歷朝聖王の遺訓に基き吾國民性の粹粋を發揮し以て現下の教育の本義を指導せられたる快著なり

師範編纂 女子高等	西島富壽 吉村千鶴	友田宜剛 先生編	友田宜剛 先生編	友田宜剛 先生編	友田宜剛 先生編
教授要項及教授例	小學裁縫教程	軍人 教育 作文教程	中等 教育 作文教範	女學 校用 作文教科書	中學 校用 作文教科書
一	四	三	五	四	五
郵 六〇					
BOC 六〇					
本書は各教科に對する教授の要項と各教科に就き種々の場合に於ける教授の實例を示したる者にして小學に教職を採る者の好參考書也	兒童用 兒童用 尋常科教員用 高等科教員用 定價九錢 定價二十八錢 定價二十五錢 定價五十錢 郵稅二錢 郵稅四錢 郵稅四錢 郵稅八錢	第一卷 第二卷 第三卷 定價二十五錢 定價三十五錢 定價四十五錢 郵稅四錢	第一卷(八版) 第二卷(七版) 第三卷(六版) 第四卷(四版) 第五卷(三版) 定價三十五錢 定價四十五錢 定價四十五錢 定價五十五錢 郵稅六錢 郵稅六錢 郵稅六錢 郵稅八錢	第一卷(五版) 第二卷(四版) 第三卷(三版) 定價二十五錢 定價三十五錢 定價三十五錢 郵稅四錢 郵稅四錢 郵稅六錢	第一卷(九版) 第二卷(八版) 第三卷(七版) 第四卷(六版) 第五卷(四版) 定價二十五錢 定價三十五錢 定價三十五錢 定價四十五錢 郵稅四錢 郵稅六錢 郵稅六錢 郵稅六錢

元其勇次 郎先生著	山岡鐵舟 先生口述	榊東正彦 先生編	安部正人 先生編	田尻稻次 郎先生著	田尻稻次 郎先生著
教育と宗教との關係	武士道	海舟言行錄	鐵舟言行錄	新體琵琶歌	溫折錄
一	一	一	一	二	一
郵 一五〇	郵 三五〇	郵 六〇〇	郵 六〇〇	郵 二七〇	郵 三〇〇
BO 一五〇					
本書は倫理哲學に精通せる博士が世の學者が教育と宗教との關係に對する謬論僻說を破して其本義を闡明せしもの宗教家教育家は續め	幕末の奇傑山岡鐵舟翁が武士道の眞意を親しく口述せられたるを勝海舟翁の之に評論を下したる快書にして兩偉人の面目は箇中に躍如	幕府末造の雜局に當り悠々として天下の大事を決し維新の鴻業を翼贊せる海舟翁の面目は本書所録の翁の記録講話逸事詩文に依て可知	碑を以て經とし劍を以て緯とし忠君愛國の本領を發揮せる鐵舟老居士の面影は此言行錄を透して窺ふべし海舟先生の評語錦上添花を添ふ	本書は田尻博士が國民の志氣を鼓舞せんが爲自ら作曲せられたるもの若夫試みに絃上に上さんが半月の妙音は梁上の塵を舞すの妙あらん	博士の新曲は曾て賢處に於て四絃半月に和したる光榮あるもの勉學の暇吟誦一番せば剛健の志操を榮ふの資として之に過ぐるなからん

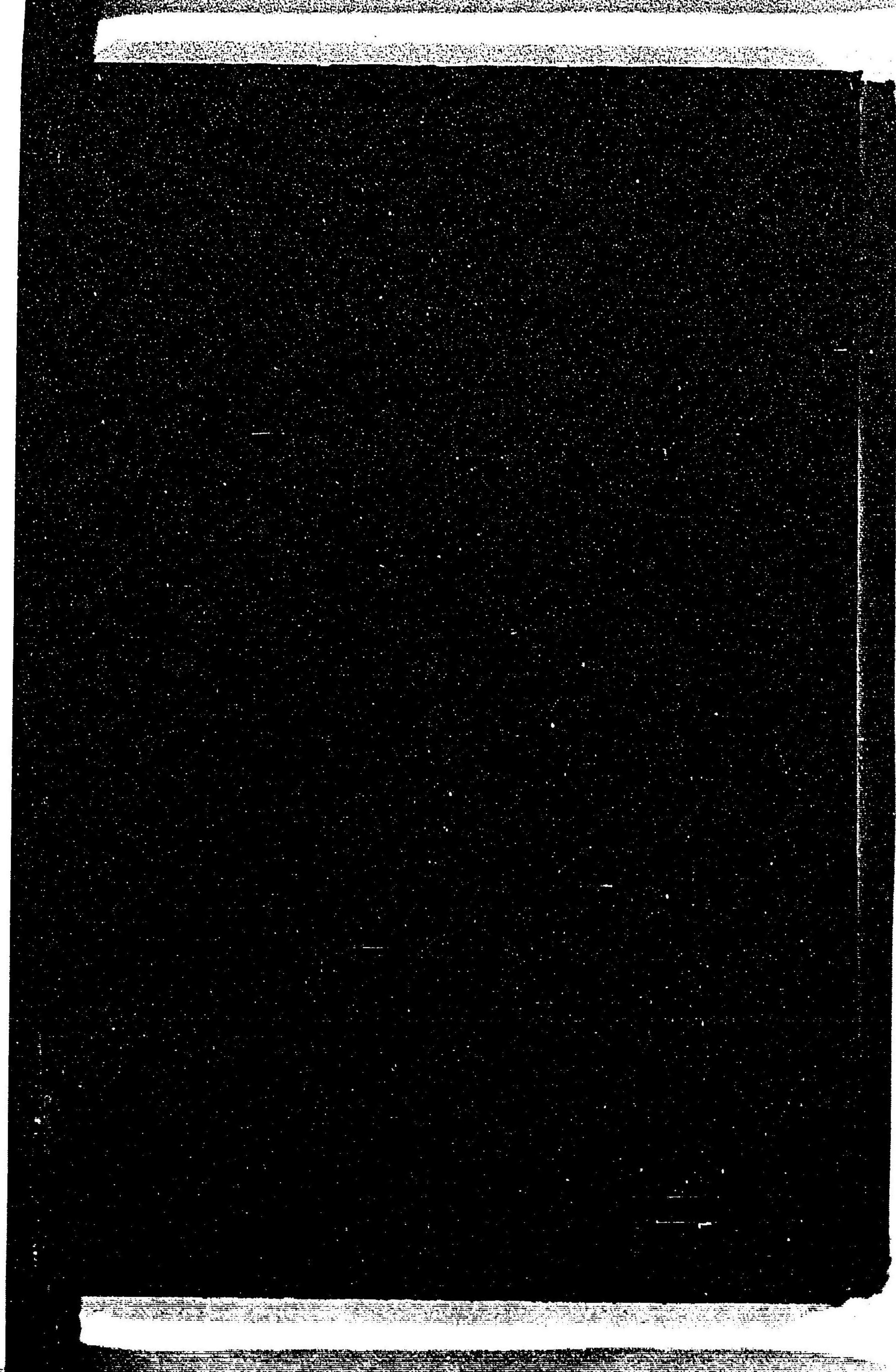
施本用書の部

澤柳政太郎先生譯	釋師雲照	釋師雲照	磯田得能師	釋師宗述	釋師雲照	高田道見師著	同	同	山川健次郎先生著
佛遺教經	十善業道經	原人論	蓮如上人 <small>并略垂訓傳</small>	靜坐のすゝめ	法の鏡	盆の由來	施餓鬼の由來	追善の心得	學生諸君に告ぐ
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	四〇	四〇	四〇	五〇

(部數により割引あり需要者は照會あれ)

325
161

325
161





019453-000-2

325-161

坐禪和讚講話

宗演/著

M45.7

ABG-0166



